

目次

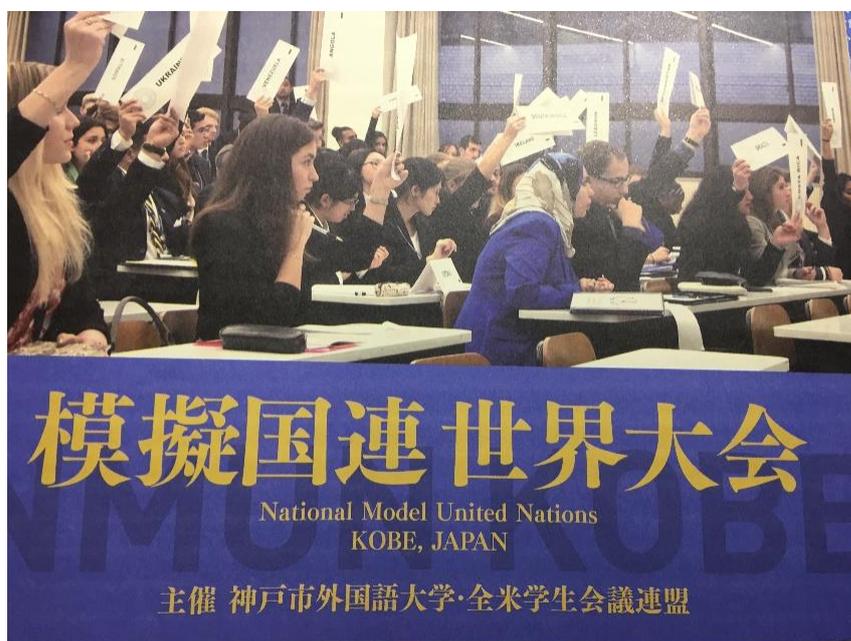
会長挨拶	西川 喬	2
イスパニア会について	竹谷 和之	4
退職して	福嶋 教隆	8
福嶋教隆先生の最終講義に出席して	フエンテス 由美	10
私の海外生活	齋藤 仁	15
退職してから	柴野 元秀	18
卒業してからマドリードで働く	柴崎 信泰	20
私はなぜメキシコにいるのか	田中 恭子	22
バルセロナ便り	中口 奈々	25
二十歳の旅、古稀の旅	平田 渡	29
新聞記事	田尻 陽一	37
新聞記事	山下 好孝	38
卒業してから	恒吉 はと子	39
外大で培った「力」と今	後藤 みゆき	41
現在のイスパニア学科	野村 竜仁	44
「ラテンアメリカ・フォーラム」その後の報告	谷 善三	46
スペイン留学	小浜 彩花	49
語劇祭	澤田 佳祐	51
講演会のお知らせ		55
近況報告		60
神戸外大イスパニア会 役員名簿		69
「会員の近況報告」に関する投稿規定		71
編集後記	齋藤 仁	72

会長挨拶

西川 喬

1969年（昭和44年）卒

本学は2016年に創立70周年を迎えましたが、その年に日本で初めてとなる模擬国連世界大会が本学で開催されました。主催は神戸市外国語大学と共に全米学生会議連盟でした。模擬国連世界大会とは、国連で実際に行われる国際合意形成の過程を模して、学生たちが様々な議論を経てひとつの決議を目指すものです。世界の各国から集まった学生たちは、個人の思想や主張を出さずに、模擬的に担当する国の外交団を形成してその国の利益のためにディベートを行い、議論するのです。これは相当な知的な作業が要求されます。なぜなら、自分自身の考え方とは別に、まったく異なる主張をしなければならないかもしれないからです。さらには国際情勢の分析や高度の表現力が求められます。公用語は英語で、世界各国から330名もの学生が本学に集まりました。会場は本学のほかに神戸国際会議場なども使われました。



この模擬国連世界大会は、2020年に再び本学において開催されることが決まりました。世界から多くの学生たちが神戸に来て、本学に集まり、白熱した議論が行われる世界大会となることが期待されます。多くの

準備や苦労があるでしょうが、学生たちには素晴らしい経験になることとなるでしょう。

さて、このような大規模な国際会議ではありませんが、あるときスペインのアルカラ・デ・エナレスという町で、国際学生フォーラムが開かれたことがあります。その町にあるアルカラ大学は、古い歴史を持つ大学で、神戸市外国語大学は

その大学と教員交流協定を結んでいて、スペイン人の先生が本学に来てスペイン語の授業を担当し、本学のイスパニア学科の先生はアルカラ大学で日本語の授業を担当するのです。私はその協定にそってアルカラ大学で教えていましたが、その関係で、国際学生フォーラムの司会をすることになりました。スペインでスペイン語を学んでいる、ドイツ人、フランス人、イタリア人など様々な学生がスペイン語という共通の言語で討論する場でした。当然、スペイン人の学生が議論では有利になるだろうと思ったのですが、意外にもスウェーデンの女子学生が、多少の間違ひのあるスペイン語でしたが、きちんと自分の意見を述べたのが印象的でした。そこには日本人の学生もいたのですが、まったく議論には加わることはありませんでした。その学生は本学の出身ではありませんでしたが、個人的にその学生はスペイン語がとても出来ると知っていたので、フォーラムが終わってから、尋ねてみると、そんな議論は日本でも友人と話したことはないのに、日本語でも無理です、との答えでした。ちなみに、その時のテーマは「テロリズムと現代世界」でした。

日本を出て、海外で働くこともこんにちでは珍しいことではなくなりました。あるいは、日本に来てビジネスの現場で働く外国人も増えています。このような状況で、今の学生たちに求められるのは、こうしたタフな議論ができる知的な対応なのかもしれません。

ところで、大学全体の同窓会である楠ヶ丘会にはいろいろな支部があり、このイスパニア会もそのひとつですが、支部は国内のみならず海外にもあります。例えばニューヨーク支部とか北京支部などは、活発に活動を続けています。スペインに行った時には、マドリードなどに住んでいるイスパニア学科の卒業生たちと話すことがあるのですが、最近、マドリード支部を作ろうという動きがあって、いまその準備中とのこと。このような活動も含めて、今後もイスパニア会はさらに活動を広げていくことでしょう。本年はイスパニア会の総会も予定されています。会員の皆様のご協力とご支援をよろしくお願いいたします。

イスパニア会について

神戸市外国語大学同窓会「イスパニア会」 設立経緯および活動報告

竹谷 和之
イスパニア会理事長
1979年（昭和54年）卒

2000年12月、「イスパニア会」設立準備委員会を神戸市外国語大学内に設置し、主として外大勤務の教職員（木村榮一先生中心に）で議論を進めてきました。そして、2001年6月3日楠ヶ丘会総会（三木記念会館）において「イスパニア会」が承認され、楠ヶ丘会同窓会として活動を開始しました。その後、少なくとも年1回の常任理事会および理事会でイスパニア会開催に向けて準備を進めました。

1. 第1回総会&記念パーティ

2005年11月26日ホテル・オークラ神戸（松風の間）において、イスパニア会第1回総会が開催されました。総会は楠ヶ丘会須藤淳会長（当時）にご出席いただき、まず報告事項として、西川喬会長からイスパニア会設立経緯の説明がありました。その後会則、役員および運営方法について審議され、全会一致で承認されました。

総会の後、当時の東谷颯人前学長、木村榮一学長をはじめイスパニア学科および非常勤講師の先生方など10名の来賓をお招きして記念パーティを開催しました。記念パーティは、イスパニア会設立祝、東谷前学長退職祝および木村学長就任祝のパーティとなりました。総会とこの記念パーティには、一期生から昨年度卒業生を含め総勢200名の卒業生が参加しました。関西はもちろんのこと九州や関東から出席した人もいて、卒業式以来会っていなかったり、数十年ぶりに再会したりして昔話に花が咲いていました。そして恩師の先生方と話をしたい人たちは順番待ちで長い行列をつくっていました。

当日は 3 つの記念パーティを同時に開催することになりましたので、時間が足りなくなるのではという心配がありました。しかしスピーチされる方々のご協力により、2時間の記念パーティは盛況のうちに無事終了しました。

総会と記念パーティは、会長はじめ理事であるイスパニア学科卒業生の皆様の献身的なご協力により開催することができました。



神戸市外国語大学 イスパニア会 第1回総会 記念パーティー 2005.11.26 ホテルオークラ神戸

2. 第2回総会&記念パーティ

2012（平成24）年6月2日ホテル・オークラ神戸（平安の間）において、イスパニア会第2回総会及び記念パーティが開催されました。

総会は、まず西川喬会長より、東日本大震災によって総会が1年延期になった経緯について説明がありました。その後、事業報告及び収支決算報告がなされ、審議事項では会則改正、役員改正について審議され、全会一致で承認されました。

総会の後、木村榮一前学長、西川喬先生をはじめイスパニア学科の先生方、非常勤講師の先生方など7名の来賓をお招きして記念パーティを開催しました。記念パーティは、木村前学長および西川先生退職祝のパーティとなりました。総会とこの記念パーティには、一期生から昨年度卒業生を含め総勢120名の卒業生が参加しました。2時間のパーティは、神戸外大フランメンクラブによる華麗な舞踊も披露され、盛況のうちに無事終了しました。

総会は5年に一度開催という計画ですが、諸般の事情により不定期になっています。



第3回総会&パーティのお知らせ

2018（平成30）年10月20日（土）に第3回総会およびパーティを、神戸市外国語大学にて開催いたします。さまざまな事情で、5年ごとの総会開催が計画通りに進まず、これもイスパニア学科ならではのラテン的(?)気質によるものではと想像しています。これまで2回の総会は、ホテルオークラ神戸で豪華に開催してきましたが、身の丈に合った総会を模索しようと理事会で話し合われました。その結果、現在の学園都市キャンパスに集ってもらい、ある卒業生にとっては新しく、またある人にとっては懐かしい学舎で新旧の交流も含めて実施しようと決定しました。学内の新しい教室で総会そして記念講演、場所を移動して三木記念会館で懇親会を開催いたします。同期やクラブの仲間など多くの方々とともにどうぞお越しください。

退職して

神戸外大イスパニア学科と海

福嶋 教隆

私は、神戸外大に 1982 年度から専任教員としてお世話になり、2017 年 3 月末日で定年退職しました。着任した頃の外大は、阪急六甲駅に近い、丘の上にありました。キャンパスのどこからでも、茅渟（ちぬ）の海と神戸の港が見下ろせました。私たち教員も、学生諸君も、その海の彼方に広がる世界を常にイメージしながら、毎日を過ごしていました。

1986 年の学園都市への移転後は、キャンパス自体は海から遠ざかってしまいましたが、ちょっと高いところに行けば、明石門に浮かぶ大橋が見え、瀬戸潮の気配が感じられます。私たちの目は、いつもその彼方を向いています。

学生諸君の熱気に押されて、学科ではトレドのオルテガ研究教育センターを皮切りに、海外協定校をどんどん増やし、今では毎年、多く外大生がスペイン語圏で学び、スペイン語圏からの留学生が日本語・日本文化を学びに外大に来ています。スペイン語圏出身の先生方も、日本人教員と対等の資格で研究教育に従事するようになりました。スペインの大学との教員の交換制度によって、常に新風が吹き込みます。国内外から講師を招いての講演会や、在学生と海外で活躍する卒業生との交流も盛んにおこなわれています。

この開放的な気分の中で、学生諸君は、常人がためらうようなハードルをやすやすと超えて、世界へと踊り出て行きます。数々の武勇伝が浮かびます。

H君は南米に旅し、世界一の落差のアンヘルの滝（ベネズエラ）を見るために、野宿を重ねて原野を踏破しました。O君はイースター島（チリ）をレンタカーで観光中、交通事故を起こして裁判にかけられましたが、スペイン語で陳述をして無罪を勝ち取りました。Y君はパンプロナ（スペイン）の牛追いに参加し、転倒して体重 700 キロの牛に背中を踏まれましたが、無傷でした。スペイン大使を外大での講演にお招きしたとき、Aさんは、新幹線の車内で大使を見かけて声をかけ、新神戸駅に着くまで、大使と会話を楽しんでいました。ちなみに、この時、Aさんは講演会のポスター写真で大使を知っただけで、全くの初対面でした。

神戸外大のモットーは、図書館の入口に書かれている *Ad altiora semper*（ラテン語で「常により高いものを目指して」）ですが、イスパニア学科の皆さんに

は、それに加えて、**Hacia la tierra de allende los mares siempre**（常に海の彼方の地を目指して）というDNAが組み込まれているように感じます。

私は立場の上では教師でしたが、知識の面でも、心の面でも、学生諸君から教えられることのほうが遥かに多い毎日でした。皆さん、長い間、ほんとうにありがとうございました。今までも、そしてこれからもずっと、神戸外大イスパニア学科の発展と、在学生、卒業生の皆さんの海の彼方へ向けられる眼差しを応援しています。

福嶋教隆先生の最終講義に出席して

フエンテス 由美（旧姓：井之上）

1995年（平成7年）卒

「福嶋先生がご退官されるんだって。最終講義が外大であるらしいよ」とイスパニア学科の同期から連絡が来たのは、2017年1月上旬のことでした。NHKテレビのスペイン語講座で時々、先生の元気なお姿を拝見しているだけに、あれっ？ご退官されるようなお年だったっけ？と、驚きました。同時に、卒業から20年以上が経つ外大の色々な出来事を思い出し、急に懐かしさがこみ上げてきました。それで、何人かのクラスメイトに連絡を取ってみると、やはり皆、同じような気持ちになったらしく、私を含め8名の同期が2月11日（土）の福嶋先生の最終講義に参加することになりました。

最終講義の会場は、当初、第2学舎の504教室となっていました。しかし、予想を遥かに上回る受講者が集まったということで、急遽、向かいの503教室に変更されました。外大で一番大きな教室です。なんとか席に着くことができましたが、講義が始まる頃には、教室が満席で、立ち見が出るほどの聴衆です。大学の先生方や、卒業生、在校生、年配の方や、ベビーカーに子供さんを乗せて出席したママさんもいました。後で聞いた話ですが、関西からはもとより、東京、千葉、名古屋、静岡、鳥取、香川、山口、福岡、沖縄などの各地から集まったそうです。

そのうち、福嶋先生が数名の先生方と共に教室に入って来られました。そして、司会の成田瑞穂先生に紹介され、講義が始まりました。

福嶋先生は黒のズボンに、黒いコートという姿。その日、外はとても寒かったのですが、教室は暖房も効いている上、これだけの人がいるので、暖かい。それなのに、先生はコートを羽織られたままです。なんだか変だなあ・・・と思いましたが、先生の第一声は何だろうと、皆、注目していました。

先生は壇上の中央にお立ちになると、突然、ガバッとコートを脱がれました。すると、黒いコートの下には、眩しいほど真っ白なジャケット！わあっ！！と会場に大きな歓声と拍手が起こりました。それまで緊張していた教室の雰囲気、先生のこのパフォーマンスで、和やかなものに変りました。さすが、エンターテイナー、福嶋先生です。

先生はこの日何を着るかについて、事前に奥様とご相談されたそうですが、色々考えた結果、この思い出のジャケットになさったそうです。その理由を私は

よく聞き取れなかったのですが、おそらくNHKテレビのスペイン語講座で着てらっしゃったものではないかと思えます。先生は「妻に、『そんなチンドン屋みたいな格好、やめときなはれ』と言われたんですけどね」なんて、おっしゃっていましたが、とてもよくお似合いです。

そして、授業のレジュメが配られました。

タイトルは『スペイン語 vs 日本語』

- 1) 音韻論
- 2) 語彙論
- 3) 形態統語論
- 4) 語用論
- 5) 結果発表

という内容です。

スペイン語と日本語を上記の観点から比較するというものでしたが、このレジュメを見た途端、私は『しまった!』と思いました。こんな難しそうな内容、理解できるだろうか。復習してくればよかったなあ・・・なんて、考えていたのです。しかし、すぐに私の不安は消えました。一見、難しそうなテーマですが、先生が色々な具体例を挙げて、楽しくわかりやすく説明して下さったからです。

講義内容は下記の通りです。

1) 音韻論

昔、スペイン語で **jabon** はシャボンと発音していたため、日本にはその音のまま伝わり、シャボン玉の語源となった。同様に、**Don Quijote** も、執筆された当時はドンキショーテと発音した。

2) 語彙論 (外来語・和製英語と西製英語)

・外来語 日本語：カタカナ語の表記は複雑。

例えば、**team** (チーム) と **tea** (ティー)。

同じ「**tea**」を前者は「チ」、後者を「ティ」と表記する。

西語：**ninja** (ニンジャ)、**judo** (ジュウドウ)、**meeting** (ミーティング)

外来語により新しい音韻が加わる。

・西製英語 **footing, futin** (ジョギング) **puenting** < **puente +ing** (バンジージャンプ) **autostop** (ヒッチハイク) **picnic** (お弁当)

3) 形態統語論 (同じ内容を表す形が2つある)

- ・ 日本語 日本 (にほん・にっぽん)
～なければならない・～なければいけない
- ・ 西語 動詞の活用形が2タイプある・・・接続法過去の ra 形と se 形
この2つの形に意味の違いはあるのか？

調査結果：ra 形のみ用いる話者や、両者に意味の差を感じない話者が多い。
しかし、両者を区別する話者も少なからず存在する。

4) 語用論 (役割語) 特定のキャラクターと結びついた、特徴のある言葉遣い

・ 異人語

日本語：『名前なんという？いちばん上の階いくのたぶんむずかしい。
オレつれていってあげる』

西語：『Como llamarte tu? Quizas ser dificil llegar al ultimo
piso. Yo ir contigo.』

動詞を原形のままにしたり、r と l の表記をわざと間違えて表記すること
で、外国人の言葉を表現する。

・ 幼児語

日本語：『はい これ きじゅの おくちゆり 血も とまるの』

西語：『Toma, echto chervira para lach heridach y dejara de
chalir changre.』

日本語では、拗音を使うことで幼児語を表現。

西語では、s の代わりに c h を使うことで、幼児語を表す。

西語でも日本語でも、舌足らずな幼児語は同じように表現するんですね。

5) 結果発表

西語も日本語も、時代とともに音韻が変化し、外来語の影響も受けている。
スペイン語を見る時、日本語を光源とすることで、新しい視界が開ける。また逆
も同じ。

この中で、私にとって特に興味深かったのは、外来語についてです。私は、こ
れまで日本語学校で留学生に日本語を教えてきたのですが、留学生たちが一番
苦労するのが、外来語 (カタカナ語) の表記です。漢字は成り立ちなどのルール
を知れば、面白いと感じる人もいますが、カタカナ語はひとつひとつ覚えていく
しかないのが大変です。でも、実のところ、彼らがなぜそんなに難しく感じるの
か、私はよく分かっていませんでした。ですから、「Team Teaching チーム・

「ティーチング」の説明を聞いて、『そりゃあ、難しく感じるのも無理ないなあ』と思わず苦笑い。留学生達の気持ちが少し理解できた気がします。

また、外来語によって、スペイン語の音韻体系に新しい子音が加わっている点も興味深かったです。講義後の質疑応答の時にも、「NINJA」を「ニンジャ」と言うか「ニンハ」と言うかで、少し議論がありました。

私も、この最終講義を受けて以来、外来語が気になり、中南米出身の友人達に「PIJAMA」の発音を尋ねてみたところ、ほとんどの人が「ピジャマ」と発音。母国で小学校教師をしていたというエクアドルの方は、『みんな普段ピジャマと言うけど、やっぱり本来はピハマだから、学校ではピハマと読ませるよ』と言っていました。どの言語も様々な影響を受けて、少しずつ変化しているのですね。

ところで、学生時代、私は福寫先生に「MODERN SPANISH」という本で、スペイン語会話・発音を教えていただきました。授業は厳しく、暗唱の試験ではとても緊張したのを今でもはっきり覚えています。どうすればネイティブらしい発音になるかなど、熱心に教えていただきました。また、当時流行していたスペインのバンド「MECANO」を紹介してくださったり、擬音語をたくさん教えてくださったことも。あるクラスメイトは、先生が紹介された「Te huelen los pies ～君の足、臭いよ～」という面白い歌が忘れられず、今でも口ずさむことがあるそうです。

今回の最終講義でも、最初にスクリーンに映し出されたのは、サムライと欧米兵士のイラスト。そして、アルファベット表記された「平家物語」が出てきたかと思ったら、漫画の「らんま 1/2」や「ドラゴンボール」の台詞が登場。最後には、「Que no te enteras. ～何でやねん～」や「Melena～ロン毛～」 「Ricitos ～天然パーマ～」なども紹介されました。もちろん、講義の内容は学術的なのですが、誰にでも理解しやすく、バラエティに富んだ引用で、とても楽しい講義でした。先生はいつも学生が興味を持って取り組めるように考えてくださっていたのだと、強く感じました。この日、こんなに多くの人が集まった理由はあると思います。

福寫先生にこの場を借りてお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。今回が外大での最終講義ということでしたが、まだまだ先生の講義を聞きたいという人は大勢いると思います。またどこかで講義される時は、私もぜひ参加したいと思います。先生のますますのご活躍をお祈り申し上げます。



海外生活

私の海外生活

齋藤 仁

1975年（昭和50年）卒業

振り返って数えてみますと約24年間で海外で過ごしました。

生まれて初めての海外生活はメキシコで始まり、1975年6月から約1年のUNAM（メキシコ国立自治大学）留学を皮切りに、2001年半ばまでの間に4回、都合約10年をメキシコで過ごしたことになります。また、その間、1980年から約3年のパナマ勤務、1989年に約1年のスペイン勤務も経験しており、スペイン語圏での生活は合計約14年になります。しかしその後、2002年から香港に2年勤務、2004年はニューヨーク、2005年には香港に舞い戻り、2012年までの7年間で香港で勤務しましたので、香港は丸9年住んだことになります。

こういった経験の中でニューヨークのマンハッタンに住んだ1年は短いながら非常に興味深い経験でした。まず、その任務が、その時勤務していた会社の現地法人設立を一人ですするというものであったことです。ニューヨークに一人の知り合いもいない中、会計士、弁護士、不動産業者、人材紹介業者等と話をしながら法的に、物理的に会社を作り上げるのはチャレンジングでした。



それから、私は学生時代から現在に至るまでジャズとクラシック音楽のファンであることです。特に、ジャズは大大大ファンで、多少なりともジャズの知識をお持ちの方ならお分かりかと思いますが、ニューヨークはジャズ的一大メッカです（そしてクラシック音楽についてもそうです）。音楽好きの人間にとって、極楽に迷い込んだようなものです

（実際、ブルーノート、ヴィレッジ・ヴァンガード、その他色々な有名ジャズクラブに75回通いました）。

それから更にもう一点は2001年以来ご無沙汰していたスペイン語との再会です。現在、アメリカ全体でヒスパニック人口は約55百万人といわれており、一部既にスペイン語が第一言語でなくなっている人たちを除いても5千万人以上の人がスペイン語を第一言語としているか、または英語とのバイリンガルです。これはスペイン語人口としてはメキシコに次ぐ規模です。そして、ありとあらゆる人種が集まっている（ように感じられる）ニューヨークでも、ヒスパニックは一大勢力です。

ニューヨークでの仕事は基本的に日本語と英語でしていました。でも、休みの日はかなりスペイン語を使っていました。私がいつもテキーラを買っていた酒屋のオーナー、街中のデリの従業員、アパートのコンシェルジュ、etc. と、いつもスペイン語で会話をしていました。驚いたのは、こういったヒスパニックの人たちがすぐに私の顔を覚えてくれたことです。恐らく、ニューヨークといえども、東洋系の顔をしてスペイン語を話す人間がかなり珍しくて、ある種の驚きであったのではないかと思います。そのお陰で、すぐに仲良くなることが出来、色々と便宜も図ってくれたりしたので、スペイン語に感謝です。英語では全く目立ちませんから。

ニューヨークではテレビのスペイン語放送が数チャンネルあり、私は英語放送ではなく、主にスペイン語放送を見ていましたし、スペイン語の新聞も幾つか発行されており、私はスペイン語新聞を買って読むことが多かったのですが、自分が暮らすアパートに新聞を持って入るときにアパートのコンシェルジュが見ていて、ある時「スペイン語が分かるのか？」と話しかけてきました。それをきっかけに気軽に話をするようになりました（彼はドミニカ共和国生まれでした）。その頃ちょうど私が禁煙をし始めたところだったので、ある日、彼に「禁煙したからあげる」といって手持ちのマールボロを7、8箱差し出すと彼は” ¡Enhorabuena! Le felicito y muchas gracias” と大喜び。そりゃそうです、あの頃ニューヨークではマールボロー箱が8米ドル近くしていました。あげたのが7箱だったとしても55ドル前後の価値です。それ以降、これまでも増して私に親切にしてくれました。これもスペイン語（と禁煙）のお陰です。

海外生活で感じることですが、海外は人や文化の多様性を感じさせてくれるところです。その中でもニューヨークは際立って多様性がある場所の一つかと思えます。その人種のモザイク度（敢えて人種のルツボとは言いません）も中途半端なものではありません。当然、街中で聞こえてくる言葉の多様性も半端ではありませんし、そこで生活し働く人達の考え方・価値観・行動様式は、各人が生まれ育った環境や受けた教育、また各人が背景に持つ文化等により大きく異な

ります。そのような環境の中で、社会として、国として、ある程度の調和を保つためには法治主義を基本として、お互いの違いを違いとして認識し、理解し、尊重することかな、という気がします。

同様のことを香港での生活でも感じました。香港はベースに中国文化を持っていると思うのですが、自由な金融センター、観光地として世界中から色々な人種・文化・宗教の人が集まる多様性に富んだ地域です。面積的に小さいとはいえ、その多様性のある社会をこれまで安定させてきたのは市民一人一人に異なるものを受け入れ、法の枠組みを尊重する精神が根付いているからだと思います。

しかし、昨今のアメリカは大統領の方向性により、そして香港は中国の（目にはあまり見えないけれどもはっきりと感ずることができる）締め付け（特に2012年以降）により、その辺が崩れ始めているような気がしており、今後の推移が心配です。



退職してから

近況報告

柴野 元秀

1970年（昭和45年）卒

11月16日、外大にてコロンビアの著名な作家エクトル・アバッド・ファシリオンセ氏の講演がありました。ラテンアメリカフォーラム講師経験者としてお招きを受けて現役の学生に混じって拝聴しました。実に興味深いお話しの後、質疑応答があり、学生達より活発な質問がありました。勿論スペイン語です。果たして自分の学生時代にこのようにスペイン語で質問ができたかどうかはなはだ心もとなく感じました。

思えば学生時代（昭和40年代）にはスペイン語の教材はほとんどありませんでした。生のスペイン語に触れる機会は授業以外ではありませんでした。今は書店ではスペイン語の教材が並び、CDがついています。ネットでは海外のスペイン語のニュースも聴くことができます。これだけの恵まれた学習環境があつたならばと羨ましく思います。

リタイア後、伊藤忠社友会西部地区事務局長を務め、今年5月退任しました。激しいビジネスの前線を離れて、何千人のOBのお世話をすることはまた楽しいものでした。多くの先輩後輩と親しくなることができました。



その傍ら一念発起をして取得した通訳案内士（英語・スペイン語）の資格を活かして昨年より本格的に通訳ガイド業を始めました。折からのインバウンドブームで仕事の依頼が予想外に頻繁に入るようになりました。特にスペイン語は希少価値があるのかよく声がかかります。京

メキシコ granados さんご夫妻と

都、奈良、大阪を中心に観光スポットについては随分と詳しくなりました。

また JICA（国際協力機構）が途上国から招聘している研修生に「日本の歴史と文化」を紹介するプログラムがあります。これを「歴史街道推進協議会」が委託を受けて展開しています。その講師を務め、月に数回教壇に立っています。講義は英語で 90 分ですがスペイン語圏からの研修生の場合にはスペイン語で行います。それぞれの国の将来を担うエリートの方々です。鋭い質問が飛んできます。いつも真剣勝負です。大いに勉強と刺激になります。

50 年も前に外大で学んだスペイン語を活かしての日常ですが、元気で体が動く間ほと、当面東京オリンピックまでを目標にスペイン語と英語にどっぷり漬かった毎日です。



JICA タンザニア研修団 東大寺にて

海外勤務

卒業してからマドリードで働く

柴崎 信泰

2012年（平成24年）卒

イスパニア学科の学生時代に、中南米を旅した経験を何らかの形で活かしたいと思い、海外営業部を持つ機械メーカーに就職しました。就職活動時に希望していた中南米担当とはなりませんでしたが、欧州地域担当として日本の本社で日々の業務をこなしていました。日本での業務においてスペイン語を使用する機会が全くないまま3年が過ぎたある日、転機がやってきました。

当社スペイン現地法人から、2ヶ月後にスペインから50名を超える団体客が本社を訪問するという連絡が入ったのです。スペイン現地法人は私の所属する課の担当国、課内にスペイン語を知っているのは私だけという状況も相まって、私はその訪問のメイン担当となりました。大学卒業以来、丸3年以上触れる機会がなかったスペイン語。そんな状況で、会の司会、新製品のプレゼンをしなければならないため、学生時の教科書を引っ張り出し、電子辞書を片手に、終業後必死になってスペイン語の練習に励みました。

そのかいあってか無事に訪問は終わり、また通常の業務に戻りましたが、それから半年後には、スペイン現地法人への赴任が決まりました。正直、スペイン語で働くことに対して不安しかありませんでしたが、これも何かの縁と思い、スペインの地へと飛び込みました。

そういった経緯で現在、マドリードにある現地法人に赴任してちょうど1年。スペイン人と一緒に働くという非常に貴重な経験をさせてもらっています。オフィスには約70名のスタッフがいますが、日本人は上司と私の2名しかいないため、やりとりは全てスペイン語で行っています。また、日本からの出向者という立場上、経理、製品、市場、物流、といった社内業務の全情報が私自身のところへ上がってくるため、着任した最初のころは、専門用語が多いこともあり、彼らが何について話しているのかさっぱり分からないことが多々ありました。そんな私が不安な顔をしていると、彼らはとても丁寧に、とてもゆっくりと説明をしてくれました。そのサポートのおかげで、この1年、この地での業務に必要な知識を少しずつ増やしていくことができました。

そんな彼らと仕事をして気づいたのは、分からないことを変にかっこつけて

知ったかぶりをしてしまうよりも、「分からないから教えてくれ、一緒に考えよう」と一歩近づくことで、それだけで友好的関係を築き、仕事を円滑に進めることができるということでした。もっと彼らに近い立場で仕事をしていくことが、自分にとっても会社にとっても良い状態だと強く感じるようになりました。

それに気づいてからは、持ち前のノリの良さとお酒の強さを活かして、従業員たちと頻繁に飲みに行くようになりました。特に、平日でも早朝まで騒いで、そのままコーヒーだけ飲んで電車で出勤、などと彼らのバイタリティに圧倒されながらも、マドリードでの毎日を楽しく暮らしています。また、社内全体でのパーティーがあるときには、毎回私が時にはスペイン語で、時には日本語でアカペラを披露することが定番化してきており、それもまた私のスペインでの生活を活気づけてくれています。



2017/18 シーズンから Atolético Madrid のスタジアムが変わりました。

Estadio Metropolitano はきれいで試合も見やすく最高のスタジアムです。

スペインに来た当初も今も「もっと大学生の時に勉強しておけばよかったなあ」と感じる日々が続いていますが、仕事をするにしても生活をするにしても、一番大事なのは文化を理解しようとする心、楽しんでやろうという心だと感じています。その心さえあれば、どの国、どの文化圏でも間違いなく暮らしていけると信じています。あと何年スペインに滞在するか分かりませんが、精一杯スペインを満喫しながら暮らしていきたいと思っています。

海外便り

私はなぜメキシコにいるのか

田中 恭子

1995（平成7年）年卒

フリーランスで通訳を始めてずいぶん経つ。よくあるお客からの質問の中で多いのは、「なぜスペイン語を勉強されたんですか。」だと思うが、その次にかなりの確率で尋ねられるのが、「どうしてメキシコなんですか。」同じ質問に少なくとも100回は答えていると思う。

私が大学でスペイン語を専攻することにしたのは、まず、英語以外の言語を勉強したかったからで、それなら世界の広い地域で話されている言語がいいと考え、さらには、当時あまり情報のなかった中南米が私の目にはなんとも神秘的で、途方もない可能性を秘めた地域に思えたからである。

大学での授業が始まり、先生方がお話になる正統派スペイン語には、何の感銘も受けなかったが（先生方、私の正直をお許してください）、メキシコからの帰国子女の同級生のスペイン語を聞いた時、その弾けるような小気味の良い発音とイントネーションに魅了された。私は、このスペイン語を話したい、そう思った。大学では留学しようと思いつけていたが、両親に快く送り出してもらうためには奨学金を狙うしかないと心に決め、無事に日墨交換留学生として1年間メキシコで勉強する機会を得た。生きたスペイン語に戸惑い、慣れない生活に右往左往し、未熟な自分に唇をかんだことも度々あった。充実した1年を過ごして帰国する時、ひと時も無駄にしたくないと張り詰め続けた1年が終わると思った時、実のところ、ほっとした。でも、帰国の日、空港に向かう車の中で、この国には必ず戻ってくるという強い確信が自分の中にあることに気づき、自分でも驚いた。

4年生に復学した私は、しばらくの間、これからの自分像が描けずに苦しんだ。そんな混沌とした自分の心に、「今、何がしたいか」と問いかけたとき、ただ一つかすかな光とともに浮かんだ思いは、「メキシコに戻りたい」であった。大学卒業後、自分の心の声にしたがって、メキシコに戻った私は、通訳という仕事に出会った。子供のころから、人と話すのはあまり好きではなく、人前で話すなど、もってのほかであった。通訳なんぞ、なりたいたとも思っていなかったのに、いざやってみると意外なことに夢中になった。求められる集中力は並大抵のも

のではなく、当時の私は、これは綱渡りにも匹敵する技だと思った。集中力が切れ、話の糸から落ちてしまえば、一卷の終わり・・・そんな夢を見ては、飛び起きることもあった。とはいえ、毎日新しく



第42回セルバンティーノ国際芸術祭
メディアアーティスト真鍋大度氏の記者会見にて

学ぶことが溢れるようにあり、冷や汗をかきながらも実践をこなしていくスリル感は、とても刺激的であった。

そんなわけで、私は今もメキシコにいる。

偶然だか必然だか、幸せなことに私はこの国で自分が没頭できる仕事に出会った。通訳という仕事は、発言の内容をいかに正確に、わかりやすく、スピーディに伝えるかにあると思う。さらに、できれば、これを美しく行う。そうになると、日本語力を磨くことに加え、スペイン語の語彙や表現を蓄え、様々なテーマについての知識を深め、理解力や記憶力を鍛える・・・といった具合に、終わりのない技の鍛錬であり、その膨大な行うべき鍛錬を思えば、自分なんぞ、まだこの道の半ばまで辿りついていない気がする。これから先、自分がどこまで行き着くことができるのかもさっぱりわからないが、遅々としてでもこの道を進み続けることに、もう迷いはない。

自分の進むべき道がわかったのなら、必ずしもメキシコにいなくてもいいのではないかという話になるかもしれない。だが、そうはならないのである。

セントロの石畳に沿って並ぶ建物のところどころ剥げ落ちた白い壁、緑の木々が茂る公園で太ったおじさんが売っている赤や黄色の色とりどりの風船、レンガ色の壁を這い上って咲きほこる赤紫のブーゲンビリア、碧い空の下で生まれる強烈な太陽の光と影のコントラスト。これらの溢れんばかりの色彩に囲まれているせいか、私のメキシコへの思いは色あせることがない。



旧大農園 (アシエンダ) の空間には、
今も当時の時間の流れが息づいて
いる。

日本に生まれ育ったにもかかわらず、メキシコという国のおおらかでちょっといい加減な空気に違和感なく溶け込み、自分の思いにまっすぐに生きてこられたのは、日本の家族、友人、仕事仲間の存在に加えて、血のつながりはなくても、まるで家族であるかのように私を思ってくれているメキシコ人たちの支えと手助けがあったからである。どんなに深刻な状況にあっても、冗談や笑顔を欠かすことなく、温かい *abrazo* (抱擁) で喜びを伝え合い、悲しみや辛さをも包み込んでしまう彼らと、彼らが暮らすこの国を愛さずにはいられない。「私には人間の伴侶はいないけれど、実はメキシコこそが人生のパートナーなのかもしれない」と言うと、他人は面白い冗談だと思おうようだが、当の本人は結構真剣にそう思っている。

この国の現実、日本のような先進国に比べると決して甘いものではない。庶民の力では、どうすることもできない理不尽が山のようにある。それでも、皆、朗らかにたくましく生きている。そんな中で、自分をめぐる人たちが小さな喜びを感じられるような瞬間に貢献することができるなら、私は嬉しい。そして、それが私がここに生きる理由だと思っている。

海外便り

バルセロナ便り

中口 奈々

1996年（平成8年）卒

神戸外大を卒業してすでに20年以上が経つ。大学時代の親しい友人達とは今やSNSで簡単に連絡が取り合える時代でもあり、あらためて卒後・・・年、と目にする、図々しいが毎回新鮮な驚きがある。外大の同級生達と以前よりも連絡をとるようになったのは、バルセロナの大学院への留学を決めた頃からだ。40代半ばからの大学院留学、しかも大学時代は完全に落ちこぼれで、なおかつ卒業後は紆余曲折を経て長年理学療法士の仕事をしていたのだから、周りもびっくりだろうが一番心細いのは決めた本人である。その心細い状況をよく分かるであろうイスパの友人達を、あらためて心の拠り所とさせてもらったのだ。

40代半ばで留学を決めた理由は様々であり紙面の関係上省略するが、人生一度だからやらずに後悔よりやって後悔の方がスッキリするだろう、そしてやらなかったことを他人のせいにしたくない、と思ったことが大きい。これは、半生をふりかえれる年数を生きたからこそ、そして長年の病院勤務で、ご高齢の方達や、意に反し人生の終末を迎える方達とお話する機会が多かったからこそ、そう思えたのだろうと思う。もちろん留学に関し、家族や友人達、そして勤務先の皆さんの理解があったことはとても大きい。大学への提出書類に関しては神戸外大の学生課の方たちも根気強く対応していただいた。関わってくださった方々に本当に感謝している。

留学先はバルセロナのポンペイファブラ大学人文学部、文学・芸術・哲学の *estudios comparativos* のコースである。比較的新しく、また非常に美しい図書館を所有する大学だ。この図書館は、平日夜中1時、試験期間中はなんと夜中3時まで(!)開館している。そんな時間までいたくはないが、実際夜中まで学生が勉強しているし、そんな時間に女性でも外を歩ける安全な街である。

勉強に関しては、私はオフィスワークよりも、実際に患者さんと向き合う時間

が長い仕事をしていたので、まず座学に慣れるのに時間がかかった。そして若い頃と違い、やはり体力も脳体力も衰えている。理学療法士の資格をとってから、心身のバランスのため長年続けていた運動（ダンス）もバルセロナでは続ける時間的余裕がなく、年齢に加え、運動不足に伴う脳体力の低下を実感した。覚えも悪ければ課題をこなすのにも時間がかかり、予想していたことだが、1年間まさに寮と大学（図書館）とスーパーという徒歩5分圏内の三角地帯で過ごした。

個人的に一番大変だったのは哲学の授業で、1学期（10週間）の間に哲学書2冊分の書評を書き、一週間で40ページ分の哲学書を読んでプレゼンの準備をし、最後に指定哲学書の5冊のうち、どれから出題されるか分からない試験があるという内容。和訳解説書ですらも難解な哲学書には本当に泣かされた。「馬鹿でも分かる哲学書」というタイトルの本に目を通して、馬鹿以下を実感した時は気が遠くなった。日本人の私は勿論アップアップだが、スペイン語圏出身の周りの同級生も皆同じようだった。とにかくスペインの大学院は、単位を一つでも落せないのが皆必死なのである。

授業についていくためには、言葉のハンデをどうやって減らしていくか、それが最大の課題である。外大時代は西和、和西の辞書を持参していたのだが（体育の授業が重なった日には荷物が重く通学だけで疲れていた）、30歳で電子辞書を手に入れ、40歳で携帯の辞書アプリを手に入れ、46歳でやっとPCの電子書籍やPDFの文書をワンクリックの辞書で読み進めることを覚えた。人間、年齢を経ても何かしら新しいものを覚えていくものだ。しかし机に向かう時間がほとんどで、言語能力（特にアウトプット、話す&書く）が向上しないのが最大の悩みだが、とにかく今は目の前にある情報をいかに早く理解するかが大事なのである。

言葉の問題もあり、勉学に関しては落ち込むことも多々あったが、心優しい友人や、学識の高い友人達とも知り合え、さらに修士論文に関しては担当教授が本当に根気強く指導してくださった。今振り返ると、本当に卒業できたのは奇跡かもしれない。だがつくづく1年ではなく2年のコースにするべきだったと思う。

（1年の予定を2年に延長する院生は非常に多い。それは納得できる勉学をするためであり、決して劣っているという感覚はない）昼間働いている大学院生も多

く、勉強も忙しいため同級生と遊びに行く機会は多くはなかったが、クラスの会食やちよいと一杯と出かける機会がある度に、私の根っこにあるラテン性に気づき SNS の友人が増えていくのは面白いなと思った。(飲んだ後に踊りに行くこともあり、ダンスを長年やっていて良かった、とも思った)

それにしても、スペインに来てからつくづく SNS の有り難さを実感した。私がバルセロナに行くにあたり、母は SNS をなんとか使えるようになり、時には顔を見ながら近況を話すこともできる。私の誕生日に、日本の友人達が SNS を使ってウクレレのライブ演奏を披露してくれたのも楽しい思い出だ。

外大時代メキシコに長期滞在した折 (94~95 年)、まめに連絡しろと言っていた母親から「もうしばらく電話せんでいいよ」と言われた衝撃の思い出が懐かしく思える (国際コレクトコールのバカ高い請求が来たらしい)。

ちなみに、私は性懲りもなく、現在別の大学院で勉強を続けている。卒業したポンペイファブラ大学の学部の授業も聴講させてもらっており、忙しい学生生活を送っている。大学院には中国人は沢山いるが日本人が少ない。私の通う修士は皆無である。幾つになっても、望むのであれば、チャレンジする神戸外大の卒業生が増えることを期待している。



大学生活において、少しも楽しい浮いた話を書けないのだが、先日カタルーニャ州以外のスペインにやっと小旅行した。マドリッド自治大学におられる恩師、ホセパン先生に会いに行ったのだ。ホセ先生に華やかさをプラスしてもらったところで、バルセロナからの便りを終わりとする。

今年（2017年）はテロ事件やカタルーニャ独立騒動があり、ヨーロッパにひそむ課題を目の当たりにしましたが、バルセロナは基本的に平穏な街です。是非いらしてください。



卒業の証拠写真です。といっても来年度卒業予定（2年コース）の生徒も出席できるなんとカジュアルな卒業式でした。

二十歳の旅、古稀の旅

平田 渡

1972年（昭和47年）大学院卒

マドリード発セビリアゆき AVE に乗る

2017年11月3日、マドリードのプエルタ・デ・アトーチャ駅でスペインの新幹線 AVE のセビリアゆき切符を買う。

窓口で、高齢者用ゴールドカード *tarjeta dorada* を作ってもらおうと、なんと1等 *preferente* 乗車券が40%割引である。しかも、出発までVIPルーム *Sala Club* がご利用いただけますとのこと。ものは試し、のぞいてみると、広々とした部屋に、ソファや肘掛け椅子が並んでおり、セルフサービスながら、コーヒー、紅茶、ビール、ジュース、コーラ、それにお菓子、さらに最新の新聞、雑誌も用意されていた。

おまけに AVE に乗ると、飛行機の機内食よろしく朝食が出てきた。まさに至れり尽くせり、すっかりいい心地になって、車窓を流れるカスティージャ平原の風景に眺め入った。

そして1967年、二十歳のとき、九州の片田舎からぽっと出の留学生として、初めてスペインを訪れて以来、はや半世紀の月日が流れたことが、ふと脳裡をかすめ、感慨ぶかいものをおぼえた。

50年前のヨーロッパへの旅

当時、ヨーロッパには、横浜から船、汽車、飛行機を乗りつぎ、5日ほどかけてシベリアまわりでゆくか、神戸からフランス郵船でマラッカ海峡、インド洋、スエズ運河、地中海をへてマルセイユにたどり着く、35日間の船旅でゆくしか方法はなかった。

わたしは北まわりを選んだ。まず船で津軽海峡をぬけ、ナホトカまで1泊2日。そこからシベリア鉄道でハバロフスクに到るのにまた1泊2日。ついでエアロフト航空のプロペラ機に乗りかえてモスクワめざして8時間。機内食で生まれ初めてキャビアに舌鼓を打ったのは嬉しかったけれど、通路の先がまったく見えなくなる、ソヴィエト時代ならではの、巨体のスチュワーデスを目の当たりにしてたじたじとなった。

モスクワでは、必ず2泊する決まりになっていた。ある日、街中を歩いているうち、うかつにも迷子になった。途方に暮れていると、少女がつかつかと近寄り、日本のかたですかと声をかけてくれた。訊けば、日本大使館に務める勝俣公使のご令嬢、久仁子さんであった。そのとき彼女が、空から舞い降りてきた天使のように見えた。おかげでぶじに、赤の広場近くのホテルに戻ることができた。

モスクワの白ロシア駅からは、汽車でフィンランドをめざした。ヘルシンキ、ストックホルム、コペンハーゲン、パリを經由してマドリード、果てはセビリアに到ろうという長い鉄道の旅の始まりである。

森と湖の国フィンランドでは、ヒッチハイクで止まってくれた車が、輸出が始まったばかりの日産ブルーバードであった。ラハティ近郊のユースホテルでは、本場のサウナ風呂に入れてもらったが、小屋を出て雪解け水で冷えきった湖に飛びこむように言われたときは、心臓マヒという言葉が頭に散らついて一瞬たじろいだものだった。

ヘルシンキからストックホルムに向かうフェリーの中で、屈強な体つきのスウェーデン人と知り合った。ちゃっかり、首都にある彼の家に数日、居候を決めこんだあと、デンマークのコペンハーゲン郊外の農場に嫁いでいる妹がいるというので訪ねてみた。そこに滞在中、小学生の息子が遺跡めぐりの遠足に行く日がやってきた。ちょうど両親が農繁期だったので、付き添いの父兄としてわたしに白羽の矢が立った。ひと助けだと考えて出かけたけれど、アンデルセンの人魚姫も吹き出しそうな、まことに珍妙な親子連れによる古代遺跡見学となった。

花の都パリでは、ゆきずりに知り合ったベネズエラ人のソルボンヌ医学生、ギジェルモ君の大学寮の部屋にもぐりこんだ。大学都市のレバノン館に住んでいたけれど、むろん来客を泊めることは厳禁されていたので、ひと目につかぬように忍び足で出入りした。食事は、ギジェルモ君の学生証を借りて学食ですませた。髭をたくわえた彼は気さくでやさしい男で、フランス人の友人クロード君とともにあちこち案内してくれたが、残念ながら現在、消息不明である。

パリのセーヌ河畔にあるオーステルリッツ駅は、スペインゆきの国際列車、つまり、バスク地方イルン経由のマドリードゆきも、南仏の国境の町、ポルトボウ経由のバルセロナゆきも発着する、スペイン旅行者ゆかりの、懐かしい思い出にまつまれた場所である。そこから、シュッド（南部）・エクスプレスという名の列車に乗りこんだたん、旅客の大半はスペイン人だったので、華やいだ、にぎやかな雰囲気変わった。母音中心のスペイン語はよくひびくし、意味はわからなくても聞きとりやすいのだ。しかも話好きなひとが多いので、場がぱっと明るくなった。日出ずる国からきた青年も、すぐ話の輪の中に入れてもらおう。ラ・コ

ルーニャ出身の相客にあれこれ話しかけられ、飲食のもてなしを受けてえびす顔である。車中で一泊すると、翌日のお昼には、あこがれのマドリードに着いた。

アンダルシア地方の古都セビリアに游学する

マドリードでは、広大なカサ・デ・カンポ公園の中に位置する、ベッド数の多いユースホステルに宿をとった。フラメンコ見物に出かけた夜、帰りがすっかり遅くなり、皆で泥棒よろしくユースホステルの外壁を乗り越えて中に入ったこと



ことを憶えている。当時はフランコ総統の独裁時代、街角のいたるところに警官の目が光り、真夜中に出歩いても何の心配もいらなかったのである。

マドリードから南下したアンダルシア地方の古都セビリアでは、正味1年暮らしたけれど、日本人に出会うことはほとんどなかった。ひとりだけ旅行者と顔を合わせたけれど、あまりにも永いあいだ日本語でしゃべっていませんでしたので、とっさに言葉が出てこなくて困惑した。その頃は、夢の中でもスペイン語で話していたのだ。

じつは、ほかにもうひとり、声だけ聴いた日本人がいる。あるとき、グア

セビリアのサンタ・クルス界限にある典型的なパティオ

ダイラ大学寮 *Colegio Mayor Guadaira* にいたとき、パンプローナにある、ナバーラ大学の寮にいる、日本人から電話がかかっているけれど、話してみますかと訊かれた。断わる理由もなかったので出てみると、東谷という名前の、博士課程の留学生であった。取りとめのない話をしたけれど、まさか帰国してからそのひとと再会することになるとは想像もしなかった。

2年半後、通産省の通訳案内業試験につづいて、神戸市外国語大学大学院の試験をうけたが、面接のとき、東谷穎人という名前の、新任まもない先生が、目の前に坐っていられたのである。おたがいに、かつて電話で話した間柄だと直感したので、すぐに意気投合した。これで合格まちがいなしと内心喜んだのもつかのま、お隣りにいらした高橋正武先生が、「平田君、文法の試験のデキは芳しくないけれど、また ABC からやり直す気はありますか」と問いただされた。「もち

ろんです」と答えたものの、だしぬけに冷や水を浴びせられた恰好で、たちまちシュンとなった。

話をもとに戻すと、セビリアではカナレーハス街にあるグアダイラ大学寮には入れなかったが、その施設を利用したり、さまざまな行事に参加したりできる通いの寮生になった。

大学は、ご存知かもしれないけれど、メリメの小説やビゼーの歌劇に登場するカルメンが働いていたという、旧タバコ工場を転用した建物の中にあった。セビリア一番の高級ホテル〈アルフォンソ 13 世〉に隣接し、デイヴィット・リーン監督、ピーター・オトゥール主演の映画『アラビアのローレンス』で、イギリス軍本部として使われたスペイン広場の、アラビア風の、半月状の、建物も近くにそびえていた。それに、春祭りフェリアの会場も目と鼻の先だった。

コロンブスやヒメネスゆかりの海辺の町ウエルバ

大学に通い始めたのは 9 月の外国人講座からだった。それまでは、セビリアからバスで 1 時間ほど離れた、ポルトガルとの国境に近い、ウエルバという海辺の町に住んでいた。そう遠くないところに、コロンブスが新大陸めざして出港したパロスという町、それに、ロバと飼い主の牧歌的な日常をつづった『プラテローロとぼく』で知られるノーベル賞詩人、ヒメネスの故郷、モゲールがあった。

辺鄙ともいえるような町に滞在したわけはふたつある。ひとつは北九州大学時代の恩師、上野政夫先生の紹介でスペイン語会話を教わっていた、下関在住のイエズス会神父、アントニオ・カベサス氏（のちに還俗して京都外国語大学教授）の生家があり、まだご母堂が健在だったので挨拶にうかがったのだ。もうひとつは、当時、内外で流行していたペンパル（ペンフレンド）、つまり文通相手が住んでいたのので会いに行ったというわけである。

ウエルバでは、三食まかないつきのペンションで暮らした。ちょうどバカンスの季節でもあり、日常会話以外はあまり勉強しなかった。ときどきモゲールのヒメネスの生家、アラセナの鍾乳洞、コロンブス記念塔、ラ・ラビダの修道院、大西洋らしい細かい白砂の、遠浅の海がどこまでも広がる、静かな避暑地、プンタ・ウンブリーアに出かけて泳いだ。

そのほかは、昼食後の、お腹がくちくなくなった、気だるいシエスタ（昼寝）の時間に、ペンパルの少女エリーの家を訪ねるのが日課であった。同い年のエリーは、両親と兄の四人家族だったが、「なぜかしら黒髪と切れ長の目に魅かれるのよ」と打ち明けてくれた。いつもふたり客間でおしゃべりやゲームに興じたものだった。なにしろ田舎町で、ひと目がうるさかったので、夕方になっても散歩に出

かけるわけにはいかなかった。せいぜいバルコニーで夕涼みをするのが関の山。いま思い出すと、いかにも自称サユリストらしい、じつに青くさくて、じれったさが募る一方の、若き日の甘酸っぱい恋であった。

外国人講座でベルギー人マドモワゼルとめぐり会う

まだ残暑きびしい8月末、セビリアに移った。当初は、いちばん下町らしい下町、四六時中フラメンコ・ギターの響きや歌が聞こえてきそうな、トゥリアナ地区の、グアダルキビール川にかかる橋を渡ってすぐの、ホステルですごした。たまにサッカー1部リーグ・エスパニョーラに顔をのぞかせるチーム、レクレアティボ・ウエルバ所属のマルティネス・オリーバ選手の紹介であった。

9月に入ると、大学でひと月にわたる外国人講座が始まった。午前中はサラリとした暑さが心地よい教室で、会話や、スペインの歴史・美術・文学・音楽についての授業。午後は市内や近郊の名所旧跡を訪ねたり、さまざまな催しものに招かれたりして愉しんだ。

入場するとき、ネクタイと上着を付けている必要があった、ロペ・デ・ベガ劇場でのコンサートにおいては、グラナードスの「スペイン舞曲第5番」のピアノ演奏を初めて聴き、うっとりとした心地になった。これは、ファリャのバレエ組曲『恋は魔術師』の中の「火祭りの踊り」とともに、今でも好きな曲である。また、郊外のサンティポンセにあるローマ時代の遺跡、イタリカでは、きれいなモザイクや大理石の柱を見ながら、ヒスパリス（セビリアの旧称）出身のハドリアヌス帝やトラヤヌス帝に思いを馳せた。

外国人講座がひらかれた頃は、大学周辺の散歩道や公園にジャスミンの花がまだ淡い香りをただよわせていたけれど、やがて講座も修了し、毎日いっしょにすごしたベルギー人のマドモワゼル、ベアトリスと別れる日がやってきた。こちらは社交に長けていない日本人、はなむけに贈りものをするなど思いもつかなかったのに、むこうからは Faber 社版『イギリス近代詞華集』をもらった。当時は、そして今も、哀しいかな、それを読んで感想をつづるだけの教養がそなわっていない。おまけに、彼女のフルネームはベアトリス・ファン・ビュッヘンハウト *Béatrice van Buggenhout* というのだが、苗字の頭に「ファン」van がついている意味すら知らなかった。のちに貴族を示すことに気がついたが、あとの祭りだった。

今回、インターネットで検索を試みた。すると、ビュッヘンハウト家はベルギーの名門中の名門だとわかった。しかも、マドモワゼルは長じて、ルーヴァン・カトリック大学教授になっていたのである。記事には、若き日の柔和な表情を思

わせる小さな写真が添えられていた。そして、 *Op 18 december 2002 overleed prof. dr. Béatrice van Buggenhout.* とただし書きがあった。どうやらオランダ語らしいけれど、ベアトリスが 2002 年 12 月 18 日にどうしたというのか。overleed の意味がわかれば、謎がとける。嫌な予感に襲われながら辞書をめくると、案の上、訃報であった。享年 56 歳。美人薄命、早すぎる昇天であった。合掌。

後日譚ながら、ルーヴァン・カトリック大学は、わたしが勤務していた関西大学と交換留学生協定をむすんでいるので、1998 年に在外研究で 1 年スペインに滞在したときに、再会しようと思えば再会することもできたはず、消息がつかめていなかったことが口惜しい。

大学寮生たちの勤勉ぶりをよそに

10 月に新学年（1967～68）が始まった。文学部の授業をうけたが、正規の学生ではなく聴講生として登録した。そのぶん気が楽であった。あとで知ったけれど、フランシスコ・ロペス・エストラーダという看板教授のスペイン文学史講義に出ていたものの、素養がないのでその真価がわかろうはずもなかった。

それにしても、スペイン人学生の勤勉ぶりにびっくりするばかりであった。一週間で息抜きをするのは日曜日の午前中だけだった。それ以外、授業のないときは、ひたすら寮の図書室にこもり、何冊もの本を読みこみ、レポート作成にいそしんでいた。のんびりムードはわたしだけ。ドニャ・マリーアの同じ下宿にいた、英国のリヴァプール大学から来たジムとロジャーは、1 年間の課題を与えられていたので、まだしも勉強に精を出していた。

寮の午後のお茶の時間に、ときおりテルトゥーリア *tertulia* がひらかれた。これは、ビールやコーヒーを片手に、生ハムやチーズ、板チョコをはさんだサンドイッチを食べたあと、各界の有名人を招いて話を聴く茶話会のようなものであった。そのとき出会ってサインまでもらったのは、当時のテニス界のスター、マヌエル・オランテス選手である。現在のラファエル・ナダル選手とまではゆかないけれど、のちに全米オープンで優勝した実績をもつ。さすがは、ヨーロッパの政治、経済、宗教を動かす、オプス・デイ経営の大学寮である。錚々たる顔ぶれがやってきた。

今からふりかえれば、セビリア大学在学中は、詩人フアン・ラモン・ヒメネスに多少関心を抱いたけれど、これといった研究テーマはなかった。もっとも、毎日スペイン語で日記をつけていたので、知らないうちに作文能力だけはついたように思う。

アラン・ドロン張りの好男子ファン・スアレス

恥ずかしながら、わたしはいつまでも物見遊山的な気分が抜けない学生だった。じつをいうと、為替が1ドル360円の時代で、実家からの送金に頼っている身、ずっと金欠気味の生活がつづいていた。そんなわけで、冬休みや復活祭前の聖週間の休暇になると、帰省する友だちがいたのでよく同行させてもらった。当時はアラン・ドロン張りの美男子だったファン・スアレスとは、カディスに近い海辺の町プエルト・デ・サンタ・マリアへ。背が高い、大柄の山男を思わせるバルトロメ・カンタドールとは、コルドバへ行った。

ファンは、永いあいだ消息がとだえていたけれど、4年前にインターネットで検索したら、画面に顔写真とともに颯爽と現われたのでびっくりした。大学での専攻どおり建築家になり、抽象画が得意な画家としても活躍中。おまけに、ある財団の会長を務めていた。

話によれば、ちょうど同じ頃、ファンの方も古い写真の整理をしたとき、わたしの写真が出てきて、ワタルはどうしているだろうかと思ったらしい。それから数日後、日本からメールが届いたので、不思議な暗合のようなものを感じたという。今ではすっかりセビリアの名士となったファンとは、その年、46年ぶりの再会を果たすことになったが、まさにネット社会さまざまであった。

バルトロメの方は、杳として消息がつかめない。けれども、黒髪で肌が浅黒い女、スペイン語でいうモレーナ *morena* の絵ばかりを描いた、コルドバが生んだ奇才、フリオ・ロメロ・デ・トーレス（ちなみに澁澤龍彦が偏愛した画家のひとり）美術館や、手作りのギター工房を訪れたり、近郊の山に登り、メスキータ寺院やローマ橋をはじめ、市内を一望のもとに見渡したりした思い出は忘れられない。

オレンジの花の香ただよう街を練り歩く

学期中は、ひまを持てあまし気味の日本人の相手をしてくれる学生はいなかった。とにかく、日々懸命になって勉強しないと進級できないのだ。だから、皆で街にくり出して羽を伸ばした珍しい夜のことが、ひときわ鮮やかに記憶に残っている。セビリアの中心街にはオレンジの樹が植えられている。これが花ひらき、実をつける秋から冬にかけては、街中がかぐわしいオレンジの匂いに包まれる。そんな中、中世の学生音楽隊の装束をまとったトゥナ *tuna* とまではいかないけれど、7、8人で隊列を縦横に組みかえながら、インディアス文書館から、アルカーサル、大聖堂、ヒラルダの塔、サンタ・クルス地区を、放歌高吟してまわったのである。歌ったのは、カタルーニャ童謡「ナポレオンには100人の兵隊

がいた」 *Napoleón tenía cien soldados* や、学生歌「さびしくひとりぼっち」 *Triste y sola* など、リフレインが多い曲だった。今でもそのときの歌詞を、思わず知らず口ずさんでいる時がある。

恋は遠い日の花火ではない

いわゆるノンポリの最たる者だったわたしだが、1968年は、パリの5月革命、そしてプラハの春を踏みにじったソヴィエト軍侵攻と、国際情勢はしだいに風雲急を告げていた。

9月に、マドリード、パリ、モスクワ、ハバロフスク、ナホトカ経由で帰国するつもりだったが、何となく心細い気持ちになった。パリのオペラ座近くの旅行代理店で、日本までの切符を買った。そのとき、担当者が計算ちがいをしてくれたおかげで、日本国内の旅費が出た。おかげでぶじに、福岡県南部の実家までたどり着くことができた。



今回の古稀のひとり旅では、セビリヤとウエルバという曾遊の地をめぐる。50年前の姿をとどめているところもあれば、すっかり様変わりをしているところもあった。しかしながら、恋は遠い日の花火ではないという思いを深くした。あちこちの道をたどるうちに、青春の胸のときめきがよみがえり、気恥ずかしいくらいだった。どうやら、中学生以来、サユリストとして始まった恋の火は今も胸の中で燃えているようである。

往年のアラン・ドロン、親友ファン・スアレスと筆者

中日新聞
夕刊

発行所 中日新聞社
名古屋市中区三の丸一丁目6番1号
〒460-0511 電話 052(201)8811

2017年(平成29年)
7月25日(火)

スペインの詩人・劇作家カルシア・ロルカ(一八九八―一九三六年)の未完の戯曲を舞台化した名古屋の劇団「クセックACT」の「観客」が来年二月、同国の国立劇場などに招かれ、上演される。公演ツアーの団長で、翻訳・構成・脚本を手掛けた田尻陽一さん(写真、兵庫県在住)は「現地でも難解とされる作品を評価され、うれしい」と語る。



クセックはスペイン語圏の演劇で知られ、スペイン公演は九回目。今回は首都マドリードの国立ドラマセンターパリエ・インクラン劇場(五百席)と、ムルシア市立シルコ劇場(九百席)で上演する。

「観客」は同性愛をテーマにしたメロドラマで彩られた作品。完成稿はスペイン内戦時に失われ、

スペインで来年「観客」上演

名古屋の劇団「クセックACT」



クセックACT「観客」から

田尻さんは加筆修正の入った手書きの初稿本や校訂本などから謎解きに挑んだ。

関西外国語大名誉教授でスペイン演劇が専門。八〇年から同劇団の文芸顧問、九六年から翻訳・脚本を担う。ロルカの全作品を翻訳・上演していく中、「観客」は、翻訳に十年以上を要し、昨春、名古屋での初演にこぎ着けた。秋に田尻さんが交流のあるスペインの演劇関係者に作品資料を持ち込み再演が決まった。

田尻さんは、戯曲の構造分析から、三十九人の配役を十四人で演じるなど独自の解釈で構成し「仮面」をかぶって生きる人間像を提示。「ヨーロッパ演劇を日本人の身体感覚で徹底的に追究してきた。

ロルカの隠れた本質が表れているこの作品にどんな反応が返ってくるか楽しみ」と話す。(井上昇治)

北大教授の名物講義 方言を分析

関西弁習てみーひん？



北海道大で関西弁について講義をする
山下好孝教授＝4月、札幌市北区

伏見出身、専門は言語学

「はよ、寝よ」「きのう、家についてへんかった？」。さながら英会話の授業のように、北海道大（札幌市）の教室で学生たちが声をそろえ、関西弁の例文を読み上げる。関西弁を外国語のように学問として分析し、方言の歴史や価値を学んでもらおうと、京都市伏見区出身の山下好孝教授（60）が15年以上続ける名物講義だ。

関西では同じ意味の言葉でも、地域によって言い方が変化するという。「来る」の否定形なら、京都市では「きーひん」、大阪市南部などでは「けーへん」、神戸市西部では「こうへん」とさまざまだ。「書く」の否定形にも多様な使い分けがある。「寒さで手がかじかんで、書かれへん」と言えば、状況的に不可能ということ。「能力的、心情的に不可能」という気持ちを表す場合は「僕、ラブレターなんて恥ずかしくて、よう書かん」「あいつは恥ずかしくて、よう書かん」「あいつは恥ずかしくて、よう書かん」と一人称か三人称かで変化する。受講生は北海道や関東、九州出身の学生その他、中国からの留学生ら計25人で、卒業に必要な一般教養の単位を取得できる。山下教授は学生たちの出身地の方言にも触れ、関西弁を話す地域の境目を探った研究例を紹介するなど、好奇心をくすぐりながら講義を進める。

音読練習では独特のイントネーションに悪戦苦闘する学生に「山下教授がそれは標準語の発音や！」「トッコミを入れる場面

学生「憧れある」音程の特徴 外国語のよう

も。甲府市出身の1年生、加藤絃己さん（19）は「関西弁に憧れがあり話せるようになりたいが、なかなか難しい」と苦笑いする。山下教授は日本語学とスペイン語学が専門で、神戸市外国語大に在学中、メキシコとスペインに留学。大阪外国語大（現大阪大）などで講師として外国人留学生に日本語の発音を教えるうちに、関西弁には、中国語のように音の高低で言葉の意味を区別する特徴があることに改めて気付いた。「関西圏以外の人にとって、外国語のようなのではないか」との思いが強まり、学問として教えようと、2000年から北大で講義を開始。04年には学習法をまとめた著書「関西弁講義」も出版した。平安時代の古文書にも発音の記録が残る関西弁は、長い歴史を経て表現が細分化し、地域ごとの特徴や価値観を反映する「無形文化遺産」だと強調する山下教授。「関西弁が話せてもあまり役に立たないが、言葉の多様さが私たちの生活を豊かにしていることを知ってほしい」と語った。

関西弁の使い分けの例

「来る」の否定形	
京都市	「きーひん」
大阪市南部など	「けーへん」
神戸市西部	「こうへん」

「書く」の否定形	
状況的に不可能	「寒さで手がかじかんで、書かれへん」
能力的、心情的に不可能	一人称 「僕、ラブレターなんて恥ずかしくて、よう書かん」
	三人称 「あいつは恥ずかしくて、よう書かん」

卒業してから

卒業してから

恒吉 はと子 (旧姓 宮内)

1999年 (平成11年) 卒

卒業してから20年ちかくたちます。書くとゾッとする年月ですが、幸い外大にはさらに年上の諸先輩方が元気にご活躍されていますし、40歳を過ぎてもういろいろ悩んだり、悔んだりしている時間ももったいないような気がしてきました。いつもというわけにはいきませんが前を向いて生きられるよう日々心がけています。

阪神大震災が起こった時、わたしは一回生で西明石近くのアパートで独り暮らしをしていました。4月まで授業がないことがわかると大阪の実家で自動車学校に通ったり、時には西宮の炊き出しにボランティアに行ったり、友達と遊んだりすごしていました。

ある日、大学の掲示板をチェックしに行くと、留年していることがわかりがっかりしました。がっかりというよりは人生が終わったような気がしました。現役で入ったのに親に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。それで留年のことは両親に言えず一年くらいたってから手紙で実は留年してしまったことを告白しました。母は「おじいちゃんやおばあちゃんにはもう少し大学で勉強したいから4年では卒業しないとっておくわ」と言ってくれました。それで本腰を入れて勉強して最低取得単位を上回って卒業できました。

卒論では中南米における先住民女性の現状を研究しました。実際、グアテマラやメヒコに旅行し、一泊数百円の安宿に滞在したり、30時間くらいかけてバスでメキシコを縦断したり無鉄砲なことをしでかしました。わたしには6歳の娘がおりますが、彼女が将来わたしと同じようなことをしたいといったらもちろん反対すると思います。

そこで主に先住民族のくらしや生き方を目の当たりにして思ったのは、人間ってしたたかだなあということです。たとえば4000メートル級の山岳に住む少数民族に会いにいったのですが、そんな山奥でも子供たちはわたしにうやうやしくネスカフェ(あること自体びっくり!)を出してくれましたし、英語の教科書をもってきて知っている数少ない英語を話してくれました。日本人というかアジア人が非常に珍しかったのだと思います。石と土壁で作られた小屋に泊っ

たのですが、夜まで子供たちが遊びに来てにぎやかでした。子供の手はあかぎれとしもやけで真っ赤に腫れていて、だいたい鼻水を垂らしていました。それでも黒い瞳はうるんで輝いていてわたしにいろんなことを話してくれました。

わたしは若かったのですが、子供にとって一番必要なのは教育であることをなんとなく肌で感じ取っていました。こんな山岳で生き残って、よりよい暮らしをするためには毎日、薪を運んだり、家畜の世話をする以外に、たまにやってくるわたしのような外国人から外貨を獲得したり、土地や商売の折衝をするためには言語や計算が欠かせません。それを提供してあげるのはやはり親や親族です。特に子供の面倒を引き受ける母親がわが子に文字や言葉を教えてあげようとすれば子供はいくらでも吸収していくと思います。女性が変われば子供が変わると思います。あれしなさい、これをもってきなさい、水を汲んできなさい、子供は現地ではただの労働力でした。親に言われて物乞いの役を受け、悲しい目を演じて小銭をせびってくる子もたくさんいました。日々の食事のことで頭がいっぱいで識字や数字に疎くなるのは仕方ありません。それでもわたしは女性が教育の重要性を認識していれば少なくともわが子には水汲みだけで終る一生を与えなくても済むはずです。

少数先住民女性は、差別カーストの一番下にあります。先住民であること、貧しいこと、女であること。だから歴史上、もっとも軽んじられ卑下され、不当に扱われてきました。しかしグアテマラのリゴベルタ・メンチュがノーベル平和賞を受賞し、事態は激変しました。先住民の人権が尊重され、先住民女性が声を上げることが世界が認めたこととなります。虐殺の対象とされてきたグアテマラの先住民が一気に脚光を浴びたのです。わたしは二回生の時に「私の名はリゴベルタ・メンチュ」という本を読んで衝撃を受けました。いつかグアテマラに行きたい思っていました。実際、訪れたことで本当の貧困、本当の差別、本当の人間のしたたかさを思いりました。今は奈良で専業主婦をしています。これからもグアテマラやメヒコを訪れることはもうないと思います。だから若い時に、思い切ったことができ、本当によかったと思っています。

娘にわたしのようになりなさいと言うつもりはまったくありません。がんばれとも言いたくありません。ですが、人間はしたたかで、女性は本当にしぶといです。わたしは家族を大切にしながら自分をこの世界に生かし切りたいです。つらいことや悲しいこと、苦しみがあっても、いつかは前を向くことができればそれらはいつか自分を作る糧になり、明日はやってくると、卒業できて今思います。

卒業してから

外大で培った「力」と今

後藤 みゆき

2012年（平成24年）卒

肌寒くなってきた季節に自室でノートパソコンのキーボードをたたいていると大学生生活でレポートやパワポ資料を作成していた一人暮らしの部屋を思い出します。私は5年前に外大を卒業してから大阪の輸入建材を扱う材木商社で営業として2年半働いていました。70年以上続く中小企業でありながらなかなかのベンチャー企業でして、スペインのタイルメーカーの仕入先開拓にゼロから



携わることができました。スペイン出張の際は会社の厚意で有給を使って3日前に現地入り。大学2回生の冬に1カ月留学プログラムで訪れたセゴビアに行き、現地コーディネーターRaquelとホストマザーSandraと再会することができました。メーカー

の方とも英語を交えながらも商談をし、今思うとまさに夢のような出来事です。

その後なんだかんだ関西を離れて、私は地元に戻ってまいりました。現在は機械商社で国内外の営業事務をしております。自動車産業が振るう浜松ではもっぱらインド・インドネシアを相手に、スペインからは遠のいた生活となり少々さみしく思いながら母とスペイン語ラジオ講座を朝の出勤前に聴いています。そんな現在でも外大で培った力は私の中で息づいていて、今を生きる私の糧となっていると感じます。「力」とは専攻学問であるスペイン語能力はもちろんですが、さらに、スペイン語を身につけるための努力をする力であったり、語劇祭というひとつの舞台をチームでつくりあげる人間力であったり、外大生活では様々な力を養わせてもらいました。特に語劇にのめりこんだ私は、語劇に限らず舞台や表現をすることに生きがいを感じるようになりました。外国語を話すこ

と（そもそも外国語を話すということ自体が日本人である自分から別の国の文化を纏う≒“演じる”ようなものかもしれない）、こうやって文章を書くことも表現のひとつですが、とりわけ歌やダンス、演劇という人の心を動かすエンターテインメントの表現の楽しさを語劇は教えてくれました。もっと表現をしてみたいと思い大学2年生のときには学外に飛び出し、語劇のかたわらNPO法人が全国各地で開催するミュージカルに参加。18歳以上の大人が100人集まって100日間だけでミュージカルをつくりあげるプログラムです。



(NPO 法人コモンビート <https://commonbeat.org/>)

様々な年齢、様々な職業、これまで生きてきたバックグラウンドもまったく異なる100人がお互いの多様な価値観に触れながら、ひとつの目標に向かって切磋琢磨していきます。当時19歳の私は、社会人とはなんと自由で、熱く、澁刺と人生を楽しむ存在なのだとかカルチャーショックを受けたことをよく覚えています。実は、このエネルギーあふれるコモンビートの大人たちを外大生のみんなにも出会ってほしいと外大祭のステージパフォーマンスにも招待したこともありました。

このプログラムは100日を経て公演が終われば解散、次にはまた新たに人を集め0から100日が始まる、という風に続いていきます。初参加から7年、つかず離れず続けているのですが、今では私がカルチャーショックを与える側となりました。地元に戻ったので、今回ははじめて中部地方で参加し、自身としては延べ500日目の公演本番を目指すチャレンジ真っ最中です。語劇という、同学科内の限られた人とだけのチームでも悩みは尽きませんでした。このミュージカルプログラムも何度参加しても共演する人は違うので、悩み、学ぶことばかりです。私には、ある意味でかつての語劇時代の青春が卒業した今でもまだ続いているのかもしれない。これからも私は語劇の小さな舞台で得た力を私の人生の糧として大胆に挑戦して生きていきたいと思っています。

※次回のコモンビート中部地方プログラムでは、我が地元浜松での初めてのプログラム開催が決まりました！

2019年3月2日(土)3日(日)、アクトシティ浜松大ホールにて公演予定です。



神戸アートビレッジセンターにて語劇の本番後

現在のイスパニア学科

現在のイスパニア学科

野村 竜仁

1992年（平成4年）卒

最近のイスパニア学科におけるもっとも大きな出来事といえば、2016年度をもって福嶋教隆先生がご定年を迎えられたことでしょう。イスパニア学科の教員として、長年にわたり神戸市外国語大学における教育と研究に尽力されてきた先生は、イスパニア学科のみならず外大の「顔」であったと言っても過言ではないと思います。同じ学科の一員として先生の警咳に接することができた日々を振り返りつつ、寄る辺なさを感じる今日この頃でもあります。

ご紹介の必要もないかもしれませんが、福嶋先生のご専門といえば現代イスパニア語統語論・意味論の研究で、動詞の叙法対立、殊に直説法と接続法の差異を主としたものです。そうした主要な研究に加えて、日本語とイスパニア語の対照研究やイスパニア語教育法研究など多岐にわたる研究に取り組み、いずれの分野においてもすばらしい成果をあげられたことは衆目の認めるところでしょう。ご研究の成果は日本だけでなく海外の研究者の間でも高く評価されており、日本人として3人目となるスペイン王立学士院の外国人会員に選出されたことは、その証左であると思います。

そうしたご自身の研究とともに、学界における最新の知見の紹介にも尽力され、一方では数多くの共同研究を主催し、日本イスパニヤ学会および日本ロマンス語学会の会長職を務めるなど複数の研究領域で指導的役割に担ってこられました。携わられた研究の成果を広く世に問われ、また幅広い読者層を対象としたイスパニア語の教本やイスパニア語圏の文化を紹介する幾多の著書を上梓され、加えてラジオやテレビの放送講座を長年にわたって担当されるなど、先生のご業績は実に多彩かつ広範なものであったことは、周知のとおりです。

福嶋先生が外大のイスパニア学科に着任されたのは1982年4月で、それ以降、専攻イスパニア語やゼミをはじめ、イスパニア語学特殊講義やイスパニア語学演習、あるいはイスパニア文学特殊講義やイスパニアの社会など、イスパニア学科における主要な科目を担当されてきました。いずれの科目においても、とても魅力的な授業を展開され、また授業以外の場でも学生一人ひとりに対して常に親身になって助言を与えられてきたことは、指導を受けた人間であれば首肯し

ていただけるのではないかと思います。学部だけでなく大学院においても卓越した指導力を発揮してこられ、多くの研究者を育成されてきました。外大だけでも17名の博士論文審査を担当され、このうちの8名の主査を務められています。

ご退職前の2017年2月11日には、「スペイン語 vs. 日本語」と題して最終講義が開催されました。当日は在校生、卒業生、研究者、一般の方など、外大の大教室に立ち見が出るほど大変多くの聴衆が集いました。そうした大勢の幅広い聴衆を前にして、福嶋先生はこれまでのご研究をテーマに、時にユーモアを交えながら実に刺激的な講義を行われました。講義の後の茶話会も盛況を極め、改めて先生のご人徳を実感する機会となりました。先生のご退職を惜しむ声は尽きませんが、幸いなことにご退職後の2017年度も学部の授業をご担当いただくことができ、また2018年度からは大学院の授業もご担当いただく予定です。今後とも末永く外大の学生に、福嶋先生の授業に接する機会がもたらされることを願わずにはられません。

もう一つ、最近のイスパニア学科における大きな出来事といえば、穂原三佳先生をお迎えできたことでしょうか。これまでもイスパニア学科の授業を担当されていましたが、2017年度からは学科の運営にもご参画いただき、また外大におけるラテンアメリカに関する教育と研究にご尽力いただけることになりました。

かねてよりイスパニア学科では、外大におけるラテンアメリカ研究を促進させることを課題としてきました。穂原先生のご専門分野はラテンアメリカ現代文学で、主たる研究対象はキューバの作家アレホ・カルペンティエルです。カルペンティエルはラテンアメリカ文学に屹立する巨人の一人であり、その研究には文学のみならず文化、芸術、歴史に関する深い造詣が必要とされます。幅広い教養が求められるカルペンティエル研究の、日本における一翼を担われる穂原先生をお迎えできたことは、ラテンアメリカ研究を一つの柱としてきたイスパニア学科にとって、大変喜ばしいことと言えるでしょう。

こうした学科所属の教員の退職や着任とともに、これまでご指導いただいた先生方がご都合により授業をご担当いただけなくなったり、一方では新たにお迎えすることになった先生方がおられたりします。今後も時代の流れとともに学科の陣容は変わっていくでしょうが、そんな折々の変化をこれからも見つめていきたいと思えます。

ラテンアメリカ・フォーラム

「ラテンアメリカ・フォーラム」その後の報告

谷 善三

1967年（昭和42年）卒

イスパニア会会報4号での、「ラテンアメリカ・フォーラム」の第1回から7回までの報告に続き、今回は第8回目と併せ、ラテンアメリカから招聘された方を含むネイティブの講師によるスペイン語での講演、いわば特別編の2、3回目をレポートします。

1. 平成29年5月22日

第8回目のフォーラムの講師は、昭和42年卒の吉川俊介氏でした。第7回までの講師は日本の本社から派遣のラテンアメリカ駐在経験者でしたが、吉川氏は外大4回生の時「海外移住連盟」からアルゼンチンの新聞社に研修生として1年間勤務した経験だけで、その後ラテンアメリカとは仕事上の係わりがありませんでした。卒業後就職した会社から派遣されたかつてスペインの植民地だったフィリピンで駐在員として勤務後、独立して貿易会社を立ち上げ、経営を軌道に乗せてから、アメリカの大学に留学しMBAを取得されました。留学中に培ったグローバルな人脈を活かして、アメリカ、イスラエル、韓国との取引を開拓・拡大した経験を基に「起業家精神を持つ」というテーマで講演をしてくれました。



平成29年度からこのフォーラムは、既存の科目「中

南米地域研究」の一環となりましたので、大勢の学生が出席しました。聴講した学生から吉川氏の生き方、考え方に刺激を受けたとの感想が多く寄せられました。

2. 平成 29 年度 6 月 19 日

ラテンアメリカ・フォーラムの 2 回目の特別編として、在神戸パナマ共和国総領事の Rafael Aparicio C. 氏に講演をしてもらいました。Sanz 教授も私も面識があったので、2 人で総領事館を訪ね正式に講師を依頼し実現したものです。テーマは「パナマー投資・歴史・文化」で、最近のパナマ情勢も交えながら多くの映像を駆使し、スペイン語で分かり易く説明をしてくれた上、質疑応答でも質問にていねいに回答してくださいました。総領事は夫人同伴で来られ、講演の後学長とも懇談され親交を深められました。

ラテンアメリカフォーラム特別版
FORO LATINOAMERICANO
ESPECIAL
PANAMÁ



駐日パナマ総領事をお迎えして記念講演をおこないます

Una charla del
Ilmo. Sr. D. Rafael Aparicio Cedeño
PANAMÁ - INVERSIÓN, HISTORIA Y CULTURA
「パナマ - 投資・歴史・文化」
【日時】 2017 年 6 月 19 日(月) 10:30 - 12:00
【場所】 第2学舎 2階 504教室

3. 平成 29 年 11 月 16 日

3 回目の特別編は、コロンビアを代表する著名な現代作家 Sr. Héctor Abad Faciolince によるテーマ「暴力の中で愛を語る—記憶と忘却の間で—」でした。名だたる作家であるだけに学生に優しい口調でゆっくりと話しかけるように語ってくれました。現代コロンビアの複雑な国内事情や社会問題などについても

話してくれました。

この講演に先立って、共に来日した娘の Daniela さんが自ら制作した歴史的なドキュメンタリーを大型画面で観る機会がありました。コロンビアの内戦で祖父を殺害された Aparicio さん一家をとりまく苦悩を描いた内容でした。

講演後、おふたりには学生から流暢なスペイン語での質問が相次ぎました。

Héctor Abad Faciolince

“Escribir sobre el amor en medio de la violencia: entre la memoria y el olvido”
暴力のなかで愛を語る—記憶と忘却の間で—

2017/11/16
神戸市外国語大学 第2学舎504教室

8:50 ドキュメンタリーを観覧 (Daniela Abad氏)
10:30 講演(Héctor Abad Faciolince氏)

講演者: エクトル・アバド・ファシオリンセ氏
現代コロンビア文学を代表する作家。代表作
「人目を忍ぶ愛の断章」(1998)「我らは忘却となるだろう」(2007)

映画監督: ダニエラ・アバド氏
ミゲル・サラサール氏と共同監督したデビュー作
「Carta a una sombra (幻影への手紙)」で受賞。

参加費・事前申込は不要です。
問い合わせ: イスパニア学科 langscience.kobe@gmail.com
078-794-8226

Directora, guionista, productora
Daniela Abad

最後に付記させていただきますが、「ラテンアメリカ・フォーラム」設立メンバーの一人である小西諄次氏（英米学科昭和 39 年卒、「ラテンアメリカ研究会」OB 会会長）が平成 29 年 9 月に急逝されました。

今回フォーラムの冒頭挨拶の中で Sanz 教授は、小西氏に対して哀悼と感謝の言葉と併せ Sr. Rafael Aparicio と娘さんの講演を小西氏に捧げる旨述べてくださいましたことをここにご報告いたします。

学生留学記

スペイン留学

小浜 彩花

イスパニア学科 3年

スペインに留学して、はやくも3カ月が過ぎようとしています。今はようやく落ち着いてきましたが、楽しいことがあった分、やはり思い悩むことや辛いことも同じ分あったように思います。最近の災難で言うと、自分の不注意と運が悪かったのとで、携帯を地下鉄で盗られてしまいました。日本人は安全な国で育ってきて、盗られないよう周りに気を配る習慣がないので日本人は特に狙われるらしく、ほとんどの日本人は何らかの被害に遭っているそうです。しかもiPhoneだとよりターゲットにされやすいので、念には念を、高いiPhoneを盗られたくない人はスペインで一万円ぐらいの格安スマホを初めのうちに買うことを強くお勧めします。盗られてから、買っておけば良かったと自分が後悔しているので。

また、私が思い描いていた理想の留学像とは違うところ、上手くいかないところも多々あって落ち込むこともありました。例えば、日本語を習っていないスペイン人とはなかなか友達になれないこと。Asia y Africa 学科から日本の社会やアイデンティティーに関する授業を2つ取っていて、他学科から宗教の授業を1つ取っているのですが、日本語を学んでいる学生とはみんなと友達になれるのに対し、宗教の授業で友達を作るのがなかなか難しく、自己嫌悪に陥ることもありました。今はそこは振り切って、むしろスペイン語のレベルがこんな自分と仲良くしてくれる Asia y Africa 学科の友達やインテルカンビオで知り合った友達に感謝するばかりです。

一方で、友達関係に“利益・不利益”の考えが生じてしまうという、説明するのが難しい悩みを抱えていた時期もありましたが、同じ物事でも視点を変えてポジティブに考えることがどんなに大事かという事を学ぶことができました。

私が3カ月過ごしてきて出した最終的な結論は、スペイン語に固執しすぎない、楽しい事だけしようともならないということです。バランス良く考えることが自分にとって一番大事なことだと気づくことができました。また、日本では経験できない事や気持ちの連続で、毎日本当に良い意味でも悪い意味でも(笑)充実しています。ここには書ききれないぐらいの色々な感情や物事を経験できて

います。また、特にスペインに来て良かったなあと思う事は、日本に居たときよりも色んな人と出会い、関わる機会がずっと増えたということです。友達と会って話をして美味しいものを食べて、飲んで、みたいなことは土日のルーティンで、平日も時間があれば誰かを誘って軽く飲んだりつまんだり出かけたりしています。人と関わるのが勉強にも繋がるので、だからこそこんなに積極的に人を誘っているのかもしれませんが。スペイン人の友達も頻繁に飲みなどに誘ってくれて、良い人達に恵まれたあとつくづく感謝の気持ちでいっぱいになります。

日本に居た頃はバイトで一日が終わったり空いている日は家に引き込まれたりしていたので（笑）。また宿題が多すぎるところや、授業中に発言を積極的にするところなど、日本の大学とは全く違う側面なども知れて、とても面白いです。自分のスペイン語力の低さ、もう3カ月が過ぎようとしているのにあまり変化を実感できなくて、一日に何回も落ち込んでいますが、あせらずゆっくり、自分を信じて頑張りたいと思います。

語劇祭

イスパニア語劇団・語劇祭について

澤田 佳祐

イスパニア学科4年

第68回語劇祭が11月25・26日に、神戸アートビレッジセンターにて行われました。今年度の我々イスパニア語劇団の演目は、アレハンドロ・カソーナの『春に自殺はおことわり』（原題：*Prohibido suicidarse en primavera*）で、2011年以来6年ぶりの再演となりました。

本編のあらすじは「芸術的な死を提供する『自殺クラブ』。そこには孤独、失恋、肉体からの解放…様々な理由により、自ら死を望む人々が集まっていた。ある日このクラブに、死とは縁遠い、愛と幸福に満ち溢れたフェルナンドとチョーレのカップルが迷い込む。彼らはそこで、兄フェルナンドの陰で劣等感に苦しむ弟フアンとの再会を果たす。自殺クラブで起こる数多の偶然の出会い。運命は動き出す。登場人物それぞれの“幸せ”とは…」というもの。9人の登場人物が「自殺クラブ」での交流を経て、それぞれの人生を歩んでいくという群像劇を演じました。



本番での舞台写真①

我々イスパニア語劇団は5つの部署に分かれて、およそ3ヶ月かけて2時間の劇を作り上げていきます。せりふの言い回しや間の取り方、動き、顔の表情など、舞台上ではお客さんに全てを見られているという意識を持って、演出担当とともに細部にまでこだわり、

自分の役になりきる役者。シーンに最も適した曲を何千何万という数ある中から選りすぐる音響。登場人物の心情の変化を美妙に視覚化する照明。1スライ

ドわずか2行に役者のせりふを凝縮し、それを1500枚以上考え、作成していく字幕。机や椅子から舞台上で役者が通ることのできる大きな扉までゼロから設計・デザイン・作成していく大道具と、舞台上で使用する小物から役柄に合った衣装・メイクまで担当する小道具からなる舞台美術。そして、これら全てをまとめ、ひとつの劇団として機能させていく監督。これら全ての要素が組み合わさって、言わば“五位一体”となってようやく、ひとつの劇になっていきます。



本番での舞台写真②

11月26日午前11時30分。総勢29名のイスパニア語劇団員は、各自の役割の持ち場で本番の始まりを知らせるベルを聞きました。最も緊張感が高まる瞬間です。これから始まるわずか2時間のために自分たちは3ヶ月間、多大な時間と努力を注いできたということを振り返ると、いろいろな思いが頭を巡ります。語劇にも楽しいこともあれば、しんどくなる時期もあります。練習が始まった頃は汗を拭いながら半袖で練習していたのが、気がつけばせりふを吐く息が白くなる季節となり、短いようで長く、また長いようで短かった3ヶ月間。この日のために、一人も欠けることなく、がむしゃらに駆け抜けました。心臓が早鐘のように波打つを感じながらも、劇団員全員が、全力を尽くした自分たちの3ヶ月を観に来てくださった方々に最大限お届けできるという自信を持っていたはずです。私個人としては役者として舞台に立たせてもらったのです

が、本番直前、舞台袖で待機しているときに見た、初めての語劇祭で緊張しつつも自信を持って本番に臨もうとしている1年生の役者たちの顔がとても印象に残っています。

語劇祭での審査結果としましては、照明と字幕がそれぞれ各部門賞に輝き、役者はローダ院長の助手・ハンスがイスパニア語劇団ベストキャラクター賞を、そしてピストル自殺を図る男・フアンが最優秀男優賞を受賞しました。そして劇団としては昨年に続き、最優秀劇



本番での舞台写真③

団賞を頂くことができました。今年度のイスパニア語劇団は、偉大な先輩方の卒業に伴い世代交代の年と言われ、実際、劇団の約半数が1年生で、上回生が例年と比べて少なく、不安要素も多々あったものの、3ヶ月の語劇練習期間中、全劇団員がそれぞれ、ひとつのものに向かって常に全力を尽くし、努力した結果が、最優秀劇団賞という形で評価されたことに劇団一同大変嬉しく思っております。



本番での舞台写真④

最後になりましたが、発音指導や台本の解釈など多岐に渡って貴重なご指導をして頂いたイスパニア学科の先生方、OB・OGの方々、本当にありがとうございました。おかげさまで、観劇に来てくださった方々を満足させることができたと胸を張って言うことができますと思います。来年のイスパニア語劇もどうぞよろしくお願いいたします。



2017年度イスパニア語劇団、本番終了後の全体写真

講演会のお知らせ

神戸日西協会は、今年創設 40 周年を迎えます。これを記念して神戸市外国語大学イスパニア学科の教授陣が『スペインの世界遺産』をメインテーマにして連続公演を行います。興味のある方はぜひご参加ください。会場はいずれも風月堂ホール（神戸元町通 3 丁目 3-10 風月堂 [ふうげつどう] 本店地階）

第 1 日目（2018 年 6 月 30 日 土曜日午後 5 時）

講演

神戸市外国語大学名誉教授 福嶋教隆

『スペインの宝：世界遺産の諸都市』（40 分）

講演

神戸市外国語大学准教授 フアン・ロメロ (Juan Romero)

『映画と民主主義への移行期、その他多くの映画について』（40 分）

第 2 日目（2018 年 7 月 6 日 金曜日午後 5 時）

講演

神戸市外国語大学 名誉教授 西川喬

『スペインの世界遺産、アルハンブラの魅力と歴史』（40 分）

講演

神戸市外国語大学教授 サンス・モンセラット (Montserrat Sanz)

『三つの文化が融合した都市、セゴビア』（40 分）

※両日とも講演後に講師・進行役による対談を開催いたします。

（進行役：前山手大学教授 山崎正雄氏）

その際、お茶とスペインの菓子でお楽しみいただきます。

参加費：各日 2000 円（神戸日西協会会員・学生） 2500 円（一般）

お茶とお菓子付き

申し込み方法・問い合わせ：TEL 078-321-5617 FAX 078-321-5665

（サロン講座係）

神戸日西協会設立 40 周年 記念行事
神戸市バルセロナ姉妹都市提携 25 周年記念

神戸市外国語大学イスパニア学科 特別連続講演会と対談

神戸日西協会が設立されて 40 年になります。この長い歳月の間に両国に大きな変化が生じましたが、この協会が二つの国の友情を代表することによって変わりなく、両国の礎は固く、お互いの協調の心は変わりません。さて、この間、特にスペインでは大きな歴史的、社会的な変化が起きました。40 年間続いたフランコ独裁制から、こんにち多くの現代的な国家で認められている民主主義への移行ですが、それは歴史的とも言える大きな変化でした。しかし、同時に、スペインには、はるか悠久の昔から変わらぬものも存在しています。今日、その多くは世界遺産として保護されています。今回 2 日間に渡って行われる 4 回の講演では、現代における変化と歴史性という二つの面に触れながら、神戸市外国語大学の教授陣が、新しい角度でスペインを紹介します。

第 1 日目 (2018 年 6 月 30 日 土曜日 午後 5 時)

神戸市外国語大学 名誉教授 福寫教隆

『スペインの宝：世界遺産の諸都市』(40 分)

スペインには世界遺産に指定された都市が数多くあり、世界中から観光客が集まってきます。ユネスコに世界遺産として登録されてから、都市の様子が一変してしまっただけのところもあります。福寫名誉教授は、主な世界遺産を紹介し、近年の変化についても論じます。

神戸市外国語大学 准教授 フアン・ロメロ (Juan Romero)

『映画と民主主義への移行期、その他多くの映画について』(40 分)

本講演は、ペドロ・アルモドバル監督の「ペピ・ルシ・ボンとその他大勢の娘たち」に関するものです。これは、スペインにおける民主主義移行期を表現した初期の映画のひとつと考えられています。この映画は日本では未公開のものです。2017 年に「ペピ・ルシ・ボンとその他大勢の娘たち」というタイトルで DVD の入手が可能になりました。この映画と民主主義への移行期に関する他の映画を通して、80 年代および 90 年代における、いわゆる「マドリードの文化反乱」時代の社会的雰囲気や、この 40 年間に起こった変化などを説明していきます。

第2日目 (2018年7月6日 金曜日 午後5時)

神戸市外国語大学 名誉教授 西川 喬

『スペインの世界遺産、アルハンブラの魅力と歴史』(40分)

アメリカの作家、ワシントン・アーヴィングは、1829年の春、アルハンブラ宮殿を訪れて、その壮麗なたたずまいに息をのんだといいます。しかし、一方、夜になると、ライオンの中庭では、非業の死をとげた騎士たちの悲痛なうめき声が聞こえてくるという。アーヴィングの『アルハンブラ物語』では、そんな話も語られています。アルハンブラ宮殿は、なぜ建設されたのか、なぜ宮殿にまつわる風説や物語が生まれたのか、そして、その後、長い間、なぜ荒廃するままに放置されたのか、スペインのレコンキスタ(国土回復運動)の歴史と重ねながら、この豪華な宮殿の過去と現在を見ていきましょう。

神戸市外国語大学 教授 モンセラット・サンス (Montserrat Sanz)

『三つの文化が融合した都市、セゴビア』

スペインで最初に世界遺産になった都市の一つが、セゴビアでした。1985年のことです。セゴビアは、こんにち相容れないと思われる三つの文化と宗教、つまり、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教の共存を象徴する都市です。その三つのものからこの小さな宝石のような都市にいろいろな遺跡が残りました。セゴビアのように西洋の歴史をはっきりと見ることが出来る場所はそれほど多くありません。例えば、威厳に満ちた歴史的建造物、ローマ帝国時代に建造された水道橋、町を埋め尽くす数多くのロマネスク教会、さらには見た者の心を揺さぶるセゴビア城。この都市を歩くと、私たちは遠い歴史、紛争や共存の意味を理解していくことになります。さらには、現代の観光とは何か、ということまでも。サンス教授があらゆる観点からこの都市を詳しく紹介します。

※両日とも講演後に講師・進行役による対談を開催いたします。その際、お茶とスペインの菓子でお楽しみいただきます。

講師紹介

福嶋 教隆 (ふくしま のりたか)



略歴

大阪外国語大学修士課程修了

マドリード大学博士課程修了

言語学博士 (Doctor en Filología)

現在 神戸市外国語大学名誉教授

主要著書

『日本語とスペイン語』(1)～(3)、くろしお出版、共著、1994, 1997, 2000年

『くらべて学ぶスペイン語』、朝日出版社、2002年

『スペイン語の贈り物』、現代書館、2004年

『ニューエクスプレス スペイン語』、白水社、2007年

『スペイン語リアルフレーズ BOOK』、研究社、2012

年

フアン・ロメロ (Juan Romero Díaz)



略歴

マドリード生まれ

マドリード大学卒業

マドリード大学大学院修士課程修了

神戸市外国語大学大学院博士課程修了

現在 神戸市外国語大学准教授

主要著書

『日本におけるスペイン語教育～日本人を対象とするスペイン語教育の諸相に関する手引き～』神戸市外国語大学外国学研究、共著、2015年

『4コマ・スペイン語 中級』朝日出版社、共著、2015年

『世界遺産で学ぶスペイン語』朝日出版社、共著 2018年

西川 喬 (にしかわ たかし)



略歴

神戸市外国語大学修士課程修了

マドリード大学博士課程修了

言語学博士 (Doctor en Filología)

アルカラ大学外国語センター講師を歴任

現在 神戸市外国語大学名誉教授

主要著書

『わかるスペイン語文法』 同学社 2010 年

『スペイン語大辞典』 白水社, 共著, 2015 年

『これが基本! スペイン語』 同学社, 2015 年

『基礎から学ぶスペイン語教室』 同学社, 2017 年

『Amigos』 第三書房, 2018 年

モンセラット・サンス (Montserrat Sanz Yagüe)



略歴

セゴビア生まれ

マドリード大学卒業

アメリカ・ロチェスター大学修士課程修了。修士号
(言語学)

同大学博士課程修了。博士号(言語学と脳・認識科学)

現在、神戸市外国語大学教授。(日本語を母語とする
人のスペイン語習得についての研究チームを指導)

主要著書

『よりよいスペイン語教育を求めて』 神戸市外国語
大学外国学研究所, 共著, 2005 年(スペイン語で執筆)

『言語教育に対する言語科学の応用』 ケンブリッジ大学出版部, 2012 年(英語で
執筆)

『ガーデンパスの言語』 オックスフォード大学紀要, 共著, 2015 年(英語で執筆)

『日本におけるスペイン語教育』 神戸市外国語大学外国学研究所, 共著, 2015 年
(スペイン語で執筆)

近況報告

杉井 皓一 1966年（昭和41年）卒

今年もクラスメートの伊藤明氏やワングル同期の重野氏に同行戴き、漸く9月末に日本百名山登頂を達成しました。その後どうしても世界最高峰のエベレストを見たくなって11月家内とエベレスト街道トレッキングに出掛けました。5,000m以上のカラパタルやゴーキョピークまで足を伸ばせばもっと間近に見えるでしょうが、高齢の身には高山病が心配で3,880mのシャンボチェの丘に建つ日本人経営のエベレストビューホテルまでカトマンズから途中ロッジ泊



で4泊5日の行程にしました。日本のアルプスでは何でも無い坂道や石段でも息切れがして何度も休憩を余儀なくされましたが、天候に恵まれて快晴の中、ヌプツェ、エベレスト、ローツェ、アマダブラムの巨峰4座がはっきり見えて大満足でした。

ヌプツェ (7,864m)、エベレスト (8,848m)
ローツェ (8,518m)、アマダブラム (6,812m)

中野 利勝 1967年（昭和42年）卒

卒業後、半世紀が過ぎました。今、72歳。学園都市の外大には、ほぼ毎年10月テニス部のOB/OG会出席のため、訪れ、汗を流した後、三宮で現役との懇親、交流を計っています。年の差は50歳前後、孫と会っている感覚でしょうか。また、毎年5月には2泊3日軽井沢コートで昔の仲間とテニス、合宿を楽しんでいます。地元千葉では週3回（月、水、金）半日、市のコートでテニスに励んでおります。たかがテニス、されどテニスです。あとの余暇は、庭仕事（垣根、庭木の剪定、隣の緑地の除草など）に苦戦苦闘しています。最後に、スペイン語が懐かしいです。もう少し、しっかり勉強しておけば良かったと後悔している今日この頃です。

谷 善三 1967年（昭和42年）卒

西宮市国際交流協会で、「スペイン語おしゃべりの会」を年4回のペースで運営してもう20年になります。当初は中南米からの主として出稼ぎの方に出身国の紹介をスペイン語で話してもらっていましたが、ここ数年はスペイン人を講師に招いて出身地域の紹介をしてもらう機会が多くなりました。参加者は当初15、6名でしたが現在は申込者が多く、30人を超えてしまいお断りをせねばならないほどです。この会への参加者は大学でスペイン語を勉強した方、旅行で好きになった方の他、スペイン語圏に駐在経験のある高齢者方々も多くいます。おしゃべりの会の様子はスペイン紹介の雑誌 ACUEDUCTO で毎回紹介しています。この会が何年も続いているのは、スペイン語やスペイン語圏の国々に関心がある人が多いからだと思っています。

頼田 敏之 1979年（昭和54年）卒

休学と留年で同期に二年遅れで卒業し、今は崩壊しつつある東芝に入社、一貫して一般産業用電機品の海外営業を担当しました。社会インフラ系なので発展途上国と欧米の出張に明け暮れた会社生活でした。ヨハネスブルグ、パリ、北京の駐在を経て子会社へ。50歳で思い立ちスペイン語のリハビリ開始、数年後横浜で唯一スペイン語が学べる神奈川大学へ。還暦になると同時に癌を発病、二度の手術で結局胃を2/3切除しました。これで人生観も変わりやりたいことをやろうと退職。現在は青山学院大学大学院 文学研究科 史学専攻のシニア院生をやっています。（バイトも少し⇒「イオン、頼田」で検索！写真有。）ということで、年金生活者ですが理解ある妻に支えられて二つ目の人生を歩んでおります。

山下 好孝 1981年（昭和56年）卒

今から10年ほど前のことである。札幌にある某カトリック系女子大学で日本語表現法なる講義を非常勤で担当していた。そこの学内新聞を見たら、学長としてヘネロソ・フローレスという方が赴任されたとあった。名前からしてスペイン系の方だと思い、事務を通じてお目にかかることにした。案の定、スペイン人の神父様で、スペイン語で楽しくおしゃべりできた。そのとき、フローレス先生から「山下さん、どこでスペイン語を習ったの？」と聞かれ、神戸外大でスペイン語を専攻したこと、そして最初に習った先生が六甲教会の神父様であったことをお話した。すると「ああ、マリアーノね！！」とペニユエラ先生のお名前を思わぬところで耳にすることとなった。ペニユエラ先生は、その時もうだいぶ健康の方を損なわれていたそうだ。2015年に逝去されたことは会誌で知ったが、大学院で1対1の授業をしてくださったことを今でも懐かしく思い出している。

石井 俊平 1983年（昭和58年）卒

卒業して早や35年近くになろうとしています。その頃はまだキャンパスが桜



ヶ丘にありました。卒業後、何故か生産畑に足を踏み入れてしまい、台湾～香港～アメリカ～香港～ベトナムと27年間の海外生活となりました。でも、スペイン語圏へ行ったのは90年に一度出張でスペインに3日ほど行っただけ。好きだったラテンアメリカ文学も、周りの人は誰も知らない変わり者という状況です。

2018年早々に日本に帰任が決まり、最近TVでスペイン語講座を見るようになりました。「ああ、こんな単語あったなあ、こんな言い回しやったなあ」というレベルですが、日本に帰ってやる事ができたと、ちょっと楽しみにしています。

中尾 菜穂子（旧姓:浜田） 1984年（昭和59年）卒

結婚後、神戸市須磨区に住んでいます。外大から車で十分ほどの距離です。仕事で母校（通ったのは六甲学舎でしたが）の前をよく通るので、遠い昔の外大生時代に思いを馳せながら、門を行き来する若き後輩たちに心の中でエールを送っています。卒業して30年以上経ちましたが、学生時代に今も変わらず親交を深め合い支え合える仲間に出逢えたことに、心から感謝しています。

藤岡 あかね（旧姓:田中） 1986年（昭和61年）卒

外大70周年記念会に参加して旧六甲校舎跡地を訪れました。楠ヶ丘の空気は当時のままで懐かしく思われました。在校中はイスパニア語劇にお世話になりましたが卒後は関係のない日々を送っております。外大祭で出会った太極拳を習い始めて28年。大阪池田市のイベントで太極拳演舞をする折、語劇祭と同じあのスポットライトを浴びる喜びを感じております。ただいま、健康寿命を更新中です。

杉浦 みどり（旧姓:福井） 1993年（平成5年）卒

卒業して20余年の月日が経ちました。初めに勤めた会社を退職して、受験し直し、作業療法士として主に病院で勤務していました。今は千葉在住で子育てに追われる日々です。そんな訳で、スペイン語とはすっかりかけ離れた生活を送っています。10歳になる息子が、たどたどしいながらも英会話を楽しそうに習っている姿を見て、私も時折テレビのスペイン語会話をつけて、必死で思い出そうとしている次第です 笑。関西へ帰省した時には、イスパの同級生と集まるのが楽しみです。学生時代を共に過ごした友達は、いつまでも心の支えとなり、大切な存在です。

金島 久仁子(旧姓：保科) 1994年(平成6年)卒

卒業後、アルバイト先の翻訳事務所にそのまま就職して14年間勤務、その後テクニカルライティングの仕事を派遣でつないでいます。スペイン語からは離れてしまいました。40歳手前で娘を出産、今は宝塚の自宅～西宮の職場～学童保育の間を行き来する毎日です。年に数度イスパニア学科の同級生達と「イスパーズの会」と称して集まり、元気をもらっています。



イスパーズの会

村川 ひとみ(旧姓 和田) 1995年(平成7年)卒

今年2月に福嶋先生の最終講義を受講してきました。そして、久しぶりの面々と再会しました。気持ちはあっという間に大学時代にタイムスリップ。楽しいひとときでした。3月には家族旅行でスペイン、ポルトガルに行き、久しぶりにスペイン語を使いました。娘いわく「お母さん、スペイン語しゃべれるんだね、すごい！」親の面目を保てたようです。これらの事がきっかけとなり、再びNHKラジオのスペイン語講座を聴き始めました。やっぱりスペイン語を勉強するのは楽しい！です。



武部 展久 1996年（平成8年）卒

卒業してメーカー勤務の後、家業を継いで現在に至っています。仕事でもプライベートでもスペイン語とは縁の無い生活ですが、せっかく大学で学んだことをゼロにリセットしたくないのでスペイン語の勉強だけは独学で続けています。私がラジオ講座を聴いているすぐ傍で小学生の二人の子ども達はまるで興味を示すことなく寂しいかぎりですが、いつか家族でスペイン語圏へ旅行に出掛け何かインスピレーションを得てくれる日を楽しみに少しずつ貯金をする毎日です。

宮本 宏史 2000年（平成12年）卒

もともとサッカーの仕事がしたかった私は、卒業後いったんスペイン語を離れ、スポーツマネジメントを学ぶため大学院に進学しました。修了後は、30歳まで神戸でイベント業、そのあと転職して東京で広告代理店でスポーツの担当者をするようになりました。そこで出会った自転車やトライアスロンの世界に魅せられて、今は独立して、メーカーの広告や大会の運営を仕事としています。

卒業後、神戸外大出身の人に出会うこともなかったのですが、Facebookをきっかけに東京にいる何人かの同級生と10年以上ぶりに再会することができました。四苦八苦しながら覚えたスペイン語会話集の文章を思い出したり、卒業後連絡が途絶えた同級生のその後を聞いたり、スペイン語からは想像もできないそれぞれが就いた仕事の話など、話題は尽きることはありません。

松下 由紀 2000年（平成12年）卒

卒業後は美容関連の企業で長く働いておりました。スペイン語と関わることはなくなってしまったとはいえ、時折テレビで流れるスペイン語圏のニュースや、サッカー選手のインタビューなどでスペイン語を耳にすると、単語ぐらいは聞き取れたりするので懐かしく思っていました。卒業後長年交流が途絶えていた同期メンバー（イSPA会と名付けました）ともSNSのおかげで再会を果たし、あの頃の話でいまだに大盛り上がりしています。各人ともバラエティに富んだその後を過ごしていて、互いによい刺激を与え合っています。今後も交流を楽しんでいきたいです。

平尾 香子 2001年（平成13年）卒

外大を卒業してから早いもので十数年、おかげさまでメーカーの海外営業として中南米を担当させて頂いており、スペイン語にふれる機会も多い方だと思います。とはいえビジネスでは英語を使う場面の方が多く、数年前までは旦那さんと子供を連れてドイツ駐在を経験させて頂いて、結局今はただの『南米好きな人』という感じ。遠くてなかなか手が出ませんが、いつか子供を連れて南米旅行に行きたいです。

中島 紗矢（旧姓：吉野） 2008年（平成20年）卒

卒業して早10年、現在は大学の職員をしています。イスパニア語を使う機会はほとんどなくなり、年々語学力が衰えていくを感じていますが、子どもの好きな絵本の西訳版を見つけて一緒に楽しんだり、自分なりにイスパニア語とのつきあいを続けています。いつか在学中に留学したトレドやセビリアへ家族と一緒に旅行に行くのが今の小さな夢なので、トレドの坂道に備えて、語学力も足腰も鍛えておかななくてはと思っています。

アメリカ・アルブケルケ・ルジミラ 2009年（平成21年）卒

計算するとゾッとするが、卒業から8年経っている。新卒では物流企業で作業服を着て輸出梱包業務。次は輸出通関業務。さらに転職してホットヨガ・インストラクター。自分の考え方も、置かれている状況もどんどん変わる。今はまた作業服を着て、航空機部品メーカーで総務、人事、在庫管理、庶務等が入り乱れるような業務。時々ポルトガル語や英語、稀にスペイン語の翻訳・通訳をするが、不慣れな機械加工関連だから結局まだまだ勉強中。

渡辺 美沙（旧姓：埴岡） 2010年（平成22年）卒

卒業後、西神中央のメーカーに就職しました。スペイン語を使うことはほとんどありませんが、日々営業課員として業務に励んでいます。私生活では二人の子宝に恵まれ、毎日仕事に子育てにと奔走しています。スペイン語とはなかなか縁遠い生活を送っていますが、外大での得難い経験や、友人たちから受けた刺激は今の私の人生の基盤になっています。たまには子供達にスペイン語で話しかけようかなあ…。

松山 千恵 2011年（平成23年）卒

なんとか社会人生活も7年目になりました。昨年は福寫先生の最終講義にも出席させていただきました。久しぶりの福寫先生の授業、懐かしい講堂と友人たちに会え、楽しい時間を過ごさせていただきました。今でもイスパニアの友人たちとは年に1度は集まります。昨年には娘も生まれ、家族3人で忙しくも楽しく生活しています。今は地元兵庫県の但馬で中学校教員をしています。大自然に囲まれ、元気な生徒たちと学校生活を送っています。

長谷川 沙英 2012年（平成24年）卒

卒業後、東京の機械部品商社に入社。5年目にドイツ駐在のチャンスを受け、現在もフランクフルトで勤務しています。欧州全域が担当ですが、元来の性格がラテン寄りの為、スペイン・ポルトガル・イタリアの仕事を積極的に作っては出張しています。海外に居る外大の先輩と食事をする機会が多々ありますが、それを聞いた上司に「外大は小さい大学なのに、卒業生が世界中に居て、仲がいいんだな」と言われました。外大生には当たり前の絆の深さが、外部からは特異なんだなと感じ、嬉しくなりました。

岡村 瞬 2012年（平成24年）卒

卒業後は製菓メーカー勤務を経て、現在は外資系金融機関で働いています。外大での出来事を振り返るとキリがないのですが、とりわけ南米へのバックパッカー旅、ラグビー部の仲間、連日の飲み会が印象深いところです。外大での経験によって海外を身近に感じる事ができたと同時に、日本の良さを再認識しました。外大生であったことを誇りに、これからも広い視野をもっていきたいと思えます。ちなみに勉学についても学生の本分として全うしましたことを念のため。

岡村 恵巳 2013年（平成25年）卒

就職・結婚・転勤で点々としていましたが、縁あって神戸へ戻って参りました。今はドイツに本社をかまえる産業機器メーカーでエンジニアアシスタントとして働いています。残念ながら卒業後はスペイン語を話す機会がなく、新婚旅行で行ったメキシコが最後となっていますが、今日論んでいる計画が実現できれば大学で学んだことを存分に活かせるのではないかと。そのご報告がまたこの場で出来るのを楽しみにしています！

橋口 美里 2015年（平成27年）卒

アパレルメーカーの国内向け営業をしています。「大学で学んだことを全く活かさない仕事に就くなんて、勿体ない。」と同僚に言われました。そんなわけがありません。外大での経験すべてが、今の自分の生き方に大きな影響を与えています。卒業後もスペイン語と闘牛文化への愛は変わらず、毎日の仕事を頑張れるのは、毎年スペインへ行くという強い思いがあるおかげです。去年は父を連れて行きました。スペイン語を話す私を嬉しそうに見ていました。

神戸外大イスパニア会 役員名簿

2012年06月02日

2015年05月23日

2016年05月28日

2017年05月13日

会 長	西川 喬	(18回)	昭和44年(1969年)卒業
副会長	谷 善三	(16回)	昭和42年(1967年)卒業
副会長	佐藤 孝三	(20回)	昭和46年(1971年)卒業
理事長	竹谷 和之	(28回)	昭和54年(1979年)卒業
常任理事	田尻 陽一	(15回)	昭和41年(1966年)卒業
	坂根 博	(21回)	昭和47年(1972年)卒業
	安藤 典子	(26回)	昭和52年(1977年)卒業
	富尾 圭子	(28回)	昭和54年(1979年)卒業
	小野 賢一	(30回)	昭和56年(1981年)卒業
	野村 竜仁	(41回)	平成 4年(1992年)卒業
	成田 瑞穂	(45回)	平成 8年(1996年)卒業
	飯島 祐子	(47回)	平成10年(1998年)卒業

理 事

池沢 英一	(18回)	昭和44年(1969年)卒業
柴野 元秀	(19回)	昭和45年(1970年)卒業
内田 雅夫	(20回)	昭和46年(1971年)卒業
増野 俊則	(22回)	昭和48年(1973年)卒業
和久田 好男	(23回)	昭和49年(1974年)卒業
齋藤 仁	(24回)	昭和50年(1975年)卒業
田岡 敬造	(25回)	昭和51年(1976年)卒業
松久 恵美子	(31回)	昭和57年(1982年)卒業
塩川 雅美	(32回)	昭和58年(1983年)卒業
石田 敦子	(33回)	昭和59年(1984年)卒業
伊藤 卓郎	(35回)	昭和61年(1986年)卒業
中澤 純一	(43回)	平成 6年(1994年)卒業

吉田 昌洪	(43回)	平成 6年 (1994年) 卒業
伊藤 かお里	(44回)	平成 7年 (1995年) 卒業
穂原 三佳	(45回)	平成 8年 (1996年) 卒業

監 事	高岡 麻衣	(44回)	平成 7年 (1995年) 卒業
	森川 香織	(53回)	平成16年 (2004年) 卒業

「会員の近況報告」に関する投稿規定

2015年3月
2016年2月改定

1. できるだけ、「ワード」で書いた原稿とすること。
2. 原則として、200字程度とする。
3. 文字サイズは12、字体はMS明朝体とする。ただし、この字体がなければ、他の字体でもかまわない。
4. メール添付で送付のこと。メールは、同学年の理事またはそれ以外の理事に送付すること。
5. 写真を提供することができる。ただし原則として、本人が写っているもので、1枚限りとする。なお、写真の掲載の可否およびそのサイズに関しては編集委員会に一任するものとする。
6. メールアドレスは原則として掲載しない。しかし、本人が希望すれば、掲載することができるので、その旨を明記すること。

編集後記

「イスパニア会」会報発行は今回で第5号となりました。

今回も大先輩から現役学生の皆さんまで、多くの方から多種多彩な寄稿をして頂き、おかげさまでバラエティに富んだ内容とすることが出来たと思っております。

原稿をお寄せ頂いた皆様方に厚く御礼を申し上げますと共に、引き続き多くの皆様の投稿を頂き、更に親睦と絆を深めていくことが出来れば幸甚です。

会報編集委員

西川 喬
田岡 敬造
吉田 昌洪
伊藤 かおり
齋藤 仁（記）

イスパニア会 会報 第5号

神戸市外国語大学イスパニア学科
イスパニア会

イスパニア会会報 第5号
2018年3月31日 発行
発行者 会長 西川 喬
発行所 イシダ印刷株式会社
